

【取扱い嚴重注意】

平成24年1月10日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成23年12月14日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

細野豪志（環境大臣／原子力発電所事故収束・再発防止担当大臣／内閣府特命担当大臣（原子力行政））

2 聴取日時

平成23年12月14日午後7時30分から同日午後11時45分まで

3 聴取場所

内閣府4号館7階大臣室

4 聴取者

高野利雄 委員

高嶋智光 参事官

加藤経将 参事官補佐

飯崎準 参事官補佐

仁保智紀 主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

下線部については、先方から特に強い非開示の要望があった。

以上

【取扱い厳重注意】

(以下、レコーダーデータ①)

○質問者 既に500人くらい、関係者のヒアリングをして、この12月26日に中間報告を取りまとめる予定でございまして、今まさにその最終作業を行っております。今日、かなり原稿が出来上がっていて印刷に回す段階になっておりますので、せっかくお聞きしたことが中間報告には反映できませんので、最終報告に反映させていただくということになります。

○細野大臣 なるほど。もうそういう状況になっているんですね。

○質問者 印刷と、あと例えば、翻訳をしまして概要を海外に発信する、そういう義務もありますので、そんなことで進んでおります。御了承いただきたいと思っております。

○細野大臣 はい。承知いたしました。

○質問者 個々の問題につきましては、事務局からもまた細かくお聞きさせていただきたいと思っておりますが、まず私の方から大まかなところをお聞きさせていただきたいと思っております。

○細野大臣 お願いいたします。

○質問者 その話に入る前提としましては、例の3月11日の当日は、大臣は補佐官としておられたわけですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 その日は、どんな立場で、どんなことをやっておられたんですかね。

○細野大臣 私は、役職が社会保障と国会対策ということでしたので、直接こういう災害とか原発とかいうことでは関わりはなかったのですが、補佐官でしたので総理を補佐するというような、これはもう絶対としての仕事で、その中の分野ですので、当日は、議員会館で会議があったものですからその会議に出ていたのですが、大きな地震でしたので、これはすぐ戻った方がいいだろうと思ひまして、そのまま車で官邸に入りました。

ですから、46分に地震が発生して、ちょっと正確な時間はあれですが、おさまってすぐ戻りましたので、3時にはもう官邸にいたと思ひます。

○質問者 そうすると、菅総理がいろいろ行動される場所は常に。

○細野大臣 はい。ほぼ全て見ています。

○質問者 分かりました。それを前提に質問させていただきます。

今言われるまさに中枢部におられて、事故が起きました。3月15日から対策本部に行かれていて、さらにまた、被害拡大防止とか、今はまさに、冷温停止、安定化に向けてご苦労されておられるわけですが、まず、事故が起きた時点、今の途中経過を含めまして、この福島原発事故に対する思いと言いますか、非常に抽象的な質問で恐縮ですが、どんなふうに今感じておられますか。ちょっと抽象的過ぎますか。

○細野大臣 いや、結構です。

私の場合は、特に福島の方と日頃から向き合っておりますので、もう本当に率直に言って国民の皆さんに申し訳ないと。特に、福島の皆さんには本当に申し訳ないという思いが一

【取扱い厳重注意】

番強いです。

どこにいろんな問題があったかというのを、私も何度も、本当に自問自答しているのですが、かなりの部分は、本当に事前のいろんな準備ができていなかったところに原因があると思っています。

ですから、そこは、本当にここで反省をして、そういうことが起こらないようにやらなければならないという思いがあって、4月から新しい組織も立ち上げるのですけれども、それに関しての準備は、相当私自身もかなり細かいところまで入りこんでやっています。

一方で、事故が起こった後、ではパーフェクトだったかと言うと、それはやはり幾つか、ここはどうかだったんだろうとか、ここでというところがあって、そこについては、しっかりと皆さんで検証していただいて、本当にそこはしっかりと国民の皆さんにも知っていただくことが必要だろうと思っています。

○質問者 分かりました。そういう意味で、今、いみじくもおっしゃられましたが、過酷事故、津波対策の問題ですね。これは、私どもまさに調査しておりますが、大臣としてそのあたりを、漠とした感じでもいいですけれども、どんなふうに思われていますか。

○細野大臣 全体として言えることは、日本の原発というのは多重防護になっていると言われていたのですけれども、本当に仔細にいろんなものを見てみると、確かに多重化はされているのですけれども、多様性がないんですね。電源も水源も全てそうなんですけれども、そこがやはり問題だったと思うのですよ。

ですから、5号機、6号機が生きていますけれども、あれはやはり空冷があったからであって、極めて明確なんですよね。ほかの1号機から4号機一つひとつ見ても、例えば冷却機能一つとっても、電源が落ちてああいう形になったら、本当にあんならざるを得ないという設計になっていて、その辺の思想がやはり間違っていたと。

ですから、本気に誰かが考えて、まさかこういうことがあったらどうだろうかと考えているように見えないですよね。例えば、非常用発電機が1階にあって一番下にあるというようなことが象徴的ですが、何でこんなことが起こったのか。それは、いろいろと東電の中でも場所について議論があったらしいですが、あそこしか空いていなかったとか。本当に誰かが、1人じゃなくてもいいですが、本当に考えていたら事故は起こらなかったと思います。そこにものすごく、一番反省が必要だったと思います。

○質問者 そういう意味で、まさに極めてポイントをつかれたお話だと思いますけれども、いろんな原因があると思います。誰も気がつかなかった、それは一体何だろうかという、まさに私どもが今調査しているところですが、何か御所見ありますか。

○細野大臣 いろんな要因が、やはり複合的に絡み合っているとは思いますが、まず、東京電力に関して言うと、震災後大分変りましたけれども、やはり個人が自由な発想でいろんなことを考えて、それを言い合って改善をしていくという風通しの良さはないと思いますね、あの会社には。

ですから、恐らく途中で現場の技術者なんかで気がついた人間はいたと思うんですね。

【取扱い厳重注意】

それが経営の判断に生かされていなかったという問題は、恐らく東電にはあつただろうと。これは、あくまで東電という会社をぐっと中で、私はずっといましたから、数か月にわたって見ていているんな人から個人の話も聞いた中での率直な印象です。

もう1つは、やはり保安院も安全委員会もそうですけれども、本当に原発の中の技術で電力会社の原発部門の人間を凌駕するくらいの知識があつて見抜けるだけの能力がない。

ですから、それこそ一番能力のある人間は、原子力部門に関して言うと、残念ながら保安院には来ていない。

ですから、ちょっと僭越な言い方になりますけれども、一線級がないということが検査体制の弱さにつながっていると思います。

○質問者 そうですね。今後の新しい組織というのは、まさにそこが極めて大事になりますよね。そういう人材が。

○細野大臣 そうですね。人材が大事ですね。

あともう1つは、これは私の確信なのですが、やはり保安院という組織はエネ庁ともう密接不可分です。全くイコールと言ってもいいくらいです。

ですから、大目的はエネルギーの安定供給で、小目的が安全と。ですから、保安院の職員は、終始、常に安定供給というものすごく大きな重しをこの辺に持ちながら安全について考えてきていますから、ここの組織の問題はものすごく大きいと思います。

○質問者 あとは、今まさに整理してお聞きしようとしたところを先にお答えいただいたのですが、我が国全体の、例えば原子力に対する安全神話とか、あるいは、安全と言っていかなければならないとか、こういうものが言われていますけれども、今回ずっと御経験された中で何か感じられることはありますか。

○細野大臣 それはありますね。安全ということになっていたのに、本当の意味でのリスクを想定して準備ができなかったということだと思うんです。大前さんがいろんなレポートを出されていて、あれは私が菅総理と相談をしてお願いをして出していたのですが、非常に言い当てられると思うんですね。どんなダメージを受けても、どんな大きな災害が来ても最後に外に絶対放射性物質を大規模に出さないような設計をしておくべきなのに、それができていない。最後は、原発が潰れても外に出さなければいけないわけですから。潰れないことを前提にしか設計してなくて、それに応じた対応ができていないわけですね。

ですから、原発を守ることと放射能を出さないことということも、分けられていない。こういったところにも象徴的にあらわれていると思うんですよ。

ですから、安全神話で安全だということを言わなければならないがゆえに、本当の意味でのシビアな事故を想定できていないというのはあつたと思います。これは、多分、気がついていたらと思うんですよ。

○質問者 東電もですか。

○細野大臣 ええ。安全だと言わなければならないから対応できないと。そちらに大規

【取扱い厳重注意】

模に投資をすれば、それこそ自己矛盾するのですが、こんなことをやるのは危険だからだろうと言われれば、いやいや安全なんですと言わなければならないという、自己矛盾に陥ってきたことは何度もあって、気がついていたと思うんですよね。それを言い出せなかったのは、まさに安全神話そのものだと思います。

○質問者 東電の中の風通しの問題もありますか。そこは関係ないですか。

○細野大臣 風通しの問題で感じるのは、やはり現場と本店の温度差であるとか、事務屋さんと技術者の立ち位置の違いであるとか、そういったところですね。

○質問者 分かりました。

津波が来まして、全電源が喪失してしまいました、過酷事故が発生しました。現場の吉田所長は、死と境目のところで本当に可能な限りの努力をされて、私どもも直接お聞きしたりして実感として伝わってきておりますが、官邸におられて、東電本店、あるいは現場、いろいろ指揮をされておられたわけですが、例えば総理あるいは細野補佐官からの指示が上手く伝わっていないとか、あるいは曲がって伝わってしまったとか、本店、現場、あるいは官邸との間の問題とか、そういうものは感じられたことはありますか。

○細野大臣 3月15日に統合対策本部を作るまでは、その繰り返しでしたね。

ものすごいフラストレーションを、多分現場も感じていたと思いますけれども、東電の本店も感じていたでしょうし、官邸も感じていました。本店と現場もきちとした意思疎通ができていなかったのは間違いないですね。東電から2人、役員と部長が、まさに東電のしっかり情報の取れる人が官邸に来て、11日の夜からはやっていたのですが、それでも入らなかったんです。彼らが嘘をついていたとは思えないですね。本店からいろんな情報、連絡を受けているのだけど分からないというフラストレーション、本当にそれが一番大きかったですね。

象徴的なのは、海水を入れる入れないの、12日の夜のあの経緯なんかは、その典型ですけれども。

○質問者 それは、例えば、通信手段が上手く行っていないということも大きな理由かもしれません。そのほかに何かありますか。

○細野大臣 通信手段は、非常に大きかったと思います。それと、官邸と東電ということ言えば、お互いに初めて会うわけですよ。本当に東電は何を考えているのかということもありましたね。東電の側も初めて菅総理と相対するわけですよね、社長も、フェローの武黒さんも、■■■■部長さんも。ですから意思疎通がなかなかスムーズに行かなかったというのはありますね。

○質問者 もともと、御承知のとおり、原災法のたてつけとしては、東電が直接官邸に報告するようになるものになっていませんよね。今回、その形になったのですが、何でそういう形になったんですか。

○細野大臣 1つは、すぐに問題になったのは、保安院のERCが動きませんでしたので、保安院に情報が入らなかったんですよね。それで、東電の本店も多分初めは情報が十分入

【取扱い厳重注意】

らなかった時期があると思うのです。東電の本店も情報が十分入らない、保安院にも情報が入らない。そうすると、現場から本店、保安院、官邸に来るのはものすごく時間のギャップがあるというのはすぐ分かったんです。それを補える手段としては、官邸でやるしかないだろうと。あの判断は、私は正しかったと思います。確かに、法律に十分即していない判断だし、ある種マニュアルにはない判断なのですけれども、あの判断は、私は間違っていなかったと思います。

オフサイトセンターもだめでしたね。オフサイトセンターも全く機能していなかったの
で、もうとにかく東京電力から直接取るしかなかったんです。そこで考えたのが、東京電
力の主たる人間を呼んで直接やることと、あとはもう最後の望みの綱が、吉田さんと携帯
で私も何度かやり取りしていたのですけれども、それで何とか補っていたのです。

○質問者 今の情報との関係で、官邸の5階と地下にありましたよね、対策室が。私ども
もいろいろ調査している関係で、官邸の5階と地下の情報交換と言いますか、これが上手
く作用していなかったのではないかというふうに思われるのですが、そのあたりは何かな
いですか。

○細野大臣 11日から12日にかけては、海江田大臣と私は地下にいたんですね。

○質問者 そうですか。

○細野大臣

○質問者

○細野大臣 そうですか。あそこで丸くなってみんなで打ち合わせできることになっ
ているのですが、あそこは何をやっていたかということ、地震とか津波のいろいろな情報を共有
していたんですよ。

携帯が
つながらないので、これはものすごく大きな支障で、上とも十分連絡が取れないような状
況でしたので、それで上に上がってきたんです。

今回の事故の対応で我々が苦労したのは、津波、地震に対処する災害対策本部としての
役割と、原発事故に対処する原災本部としての役割という二正面作戦を強いられたので、
そこが本当に辛いところだったんですね。

、原発の
事故というのはもうまさに本当にその場で即決の判断が求められたので、そこは5階だど
いう役割分担を12日の昼頃には、もうこれはみんなはっきり認識していたと思いますけれ
ども、そういう役割分担をしたんですよ。それで、いろいろな避難とか本当に必要なこと
に関しては、危機管理監と官房副長官（※事務局注：官房副長官補を指すものと思われる）
が上に上がってきて、官邸としての判断をしっかりとした上で、下でオペレーションをや

【取扱い厳重注意】

るということをやっていました。

○質問者 下に、例えば省庁の幹部が集まっていますよね。そういう人たちの情報を集約して、5階の方でそれを吟味するとか、そういう流れもあったんですか。

○細野大臣 その役を危機管理監と官房副長官（※事務局注：官房副長官補を指すものと思われる）、これは警察と防衛ですけれども、その2人がやっていたというふうに私は認識していました。

ただ、今から思えば、例えばヨウ素剤の問題とか、避難の、本当にどういう順番でどうなっているのかということについて5階は情報をほとんど持っていなかったんです。

○質問者 そうですね。ちょっと先に行っていますけれども、まさに最初2キロ、3キロ、10キロ、20キロと行きますよね。その情報が5階だけでほとんどやっておられて、今言われるような情報を基に、まさにマニュアル的に言うとか下から上がってきて、それをどう判断するかという話になるのですが、それをやることにはならなかったわけですね。

○細野大臣 そのこの部分の機微にやり取りをするという雰囲気では5階はなかったんですね。5階は何をやっていたかという、何とか発電所をおさめようとしていたんですよ。11日から12日にかけてもそうですし、15日まで、最後までそうでした。水素爆発をできるだけ防いで、これ以上事故がエスカレートしないようにするためにはどうするかと。

ですから、例えばどうやって水を入れるかとか、電源車をどう集めるかとか、自衛隊を出すか出さないか、そういうことをやっていて、避難のことというのは、避難をさせようと決めるわけですよね。それで、どうやって避難をさせるかというのは、まさにこれは危機管理監の世界で、それでやってくれるという、その役割分担をしていたんですよ。

私の場合は、どちらかというところから海江田大臣と一緒に炉の方の、東電とのやり取りを任されていたので、そちらだけで相当神経をすり減らしていましたから、こちらはタッチできないものというふうに自分で考えていたのですね。例えば官邸の中で、危機管理監、官房副長官だけではなくて、政務の官房長官とか副長官が果たしてどれくらいやっていたのかもちょっとよく分からないんですよ。今から思えば、もう少しそちらをしっかりとやっておいた方がよかったですらうなと。

○質問者 そうですね。まさに、福島におられて逃げろと言われた人たちは、どのくらいで帰ってこられるかどうかわからなくて、まさに着のみ着のまま逃げているんですよ。あとは、SPEEDIの問題もそうですけれども、結局方角が放射能のある方向に行ってしまったとか、そういう非常に気の毒な状態がありますよね。

○細野大臣 はい、そうです。

我々が気にしたのは、本当に水が入るか入らないかというぎりぎりの状況の中で、果たして3キロでいいのかとか、10キロでいいのかとか、病院にいる人たちは避難できるのかとか、そういうことは気にしていたんですよ。気にしていたんですけども、ではオペレーションがどうなっていて、逐一情報を受けていたかと言うと、少なくとも私のところにはその情報はなかったの、そこがもう少しきめ細かくやれなかったのかというのは思い

【取扱い嚴重注意】

ますね。

○質問者 ちょっと元に戻りますけれども、何とか原発を過酷事故にならないように一生懸命やっておられた、海水あるいは真水を入れるとか、あるいはベントを早くするかというところでいろいろやっておられたわけですね。そこは、官邸の指示と東電側の動きというのは矛盾はなかったんですか。当初は、何で早くベントしないんだ、東電はおかしいじゃないかということを思っておられたみたいだけでも。

○細野大臣 そこは、相手が本当に何を考えているのかということが初めは疑心暗鬼で分からなかった部分もあったんですよね。例えば、1号機のベントなんかは、もう11日の夜にはやろうということになっていたわけです。もうやりますと言っていたのだけでも、いつまでたってもできなくて、それができないのか、やらないのか。ですから、12日の朝の4時とか5時頃は、何でやらないんだという話になっていたわけです。最終的には、どうもできなかったようなんですけれども、やれるみたいなことを我々は聞いていたから、なぜやれないのかということに対してのすごいフラストレーションはあったんですけれどもね。

そのフラストレーションというか、お互いに、果たして相手は何をを考えているのかが十分分からないことが、例えば海水の注入なんかにも若干影響してしまっていて、本来であれば水を入れるのは当然なのだし、真水がなくなれば海水というのはもうそれしかないわけですから、やはり初期の段階で東電は海水は嫌がってたんですよ。11日から12日の朝頃までは、まあ、それは当然ですね。炉を残したいと思うし、あとは、海水を入れたらその後のそれこそ処理するのが、廃炉にするのが大変になってしまいますから当然なんですけれども、そうすると、海水を入れたくないのではないかというふうに、ベントのときと同じように、ちょっと先入観はあったと思います。東電は、もうベントをするしかないと思っていたし、真水がなくなったら海水しかないというふうに考えていたと思うんですけれども、本当にそう考えているのだろうか。目の前に、武黒さんと■■■さんの2人しかいませんからね。その部分で本当にお互いに共通認識があったかという、怪しい部分がありますね。それは、12日に水素爆発があって海水が入った後あたりから、もうそんなことを言っていられなくなったので、もう12日の夜くらいからはかなり解消してきたと思いますけれどもね。

○質問者 ちょっと差し支えなければという話で、菅総理の対応でいろいろ巷間言われていますし、その関係でお聞かせいただきたいのですが、1つは、海江田経産大臣が菅総理に事態報告をして、原災法15条の緊急事態宣言をしましょうと言ったところ、党首会談があったので、そこで中断してしまったということがありましたよね。これは、緊急事態が先だ思うんですけれども、なぜ中断してしまったのかというあたりはどんなことだったのでしょうか。

○細野大臣 野党の党首が来て、あのときはたしか、とにかく専念してくれということを言いに来たんですよね。中身は確認していませんけれども、恐らくそうだったと思います。

【取扱い厳重注意】

そういう話だろうというのは分かっていたんです。でも、官邸は官邸でこれはどうするかという話になっていたのも、なかなか難しい判断でしたよね。

初めは、総理がすぐに行けなかったのも、たしか岡田幹事長と興石会長が対応したはずなんです。ちょっと待ってもらったんですよ。そこですばっと緊急事態を決めてしまえばよかったのですが、やはり総理も事態を把握したいと思ったんだと思うんですよ。海江田大臣と恐らく二、三十分やり取りしていたんですかね。

○質問者 そうですね。17時42分に海江田大臣が来られて、18時12分に出られて、19時3分に緊急事態宣言をやっていますから、そのくらいの時間がありますね。

○細野大臣 そうなんですよね。

総理というのは、事態をすぐ把握したい、自分が分かった上で対応したいというのがすごくある人なので、海江田大臣におまえに任せるから、そうなんだな、では緊急事態だというタイプの人ではないんです。特に、一番初めでしたから何が起きているんだということを開きたがったわけですよ。これは、菅さんのある種の性格もあるんですよ。海江田さんも一生懸命説明をされたし、保安院の関係者も来て説明していたのですけれども、結局、私も聞いていてもちょっとどうなのかという、まだ事態が把握できないくらいの情報しかなくて、そこですばっと任せて、では緊急事態だという発令はしなかったんですよ。そうやっている間に野党が来て、多分、とにかくもう専念してくれという話だろうと分かったのも、初めは2人で対応してもらっていたんですけれども、私が頼んだんですよ。総理は今こういうことだから岡田さんと興石さんに先にお願ひしますということを行ったのですけれども、やはり行かないやならないだろうという雰囲気になったんです。総理も、それで行って、でもわずかでしたよ。与野党会談したのは多分15分くらいじゃないかと思うのですけれども、帰ってきてもう一回説明を聞いて、緊急事態宣言を出したんです。

ですから、その前に出すという手はあったかもしれませんが、ただ、では逆に早く出したら何か対応できたかという、それはほとんどないんですよね。ずっと連続でやっていたから。

ですから、それが、時間が例えば30分とか遅れることによって何か支障が出たとは思いませんけれども。

○質問者 もう1つは、ちょっと細かな話か、あるいはそうではないかもしれませんが、現地対策本部への権限委任の問題がありまして、御承知のように原災法20条で、その場合には現地対策本部長に委任できるというのがございますよね。これがどうもなされないまま事態が進行して、ある意味では強制権限があるような権限を委任がないままやっているわけですが、何でこんなことになったのかなと思うのですけれども、そのあたりはどんな感じですか。

○細野大臣 原災法の規定というのは、かなりそういう現地に任せるという形に確かになっていて、そのことは認識はしていました。ただ、オフサイトセンターが県庁に移ったの

【取扱い厳重注意】

は15日ですよ。15日でしたけれども、私は直接連絡はしていなかったのですけれども、見て、話を聞いていますと、保安院の担当者もあっちに行ったりこっちに行ったりして、おおよそここで判断できるような雰囲気には見ていなかったですよ。

ですから、そもそも保安院が、ERCがそういう意味で情報が取れていないということとほぼイコールで、これはオフサイトセンターもだめだとは思っていたわけです。ですから、そこはやむを得なかったと思いますけれどもね。

○質問者 逆の意味で、原災法のたてつけが、本当にこういう複合災害みたいなものが発生したときに対応できるような法律になっているのかどうなのか、そのあたりは何か感じられたことはありますか。

○細野大臣 それは、全くなっていないですよ。それはなっていないと思いますね。

ですから、オフサイトセンターの場所も大熊町にありますけれども、その後、南相馬が何かに移ることになっていきますけれども、そちらもだめでしたよね。これだけ大きな事故を想定していない。意思決定も委任をすることが前提になっていますけれども、ではそれができない場合はどうするかということについての準備もないですし、その原災法もそうですけれども、防災計画もほぼそれを写す形で詳しく書いていきますけれども、そこもそういう様々なケースを想定していないですよ。

○質問者 単純災害ですよ。

○細野大臣 そうなんです。そういう意味では、我々もそういうものがあるのは知っていたし、これはどうなっているんだと時々問い合わせたりしてその部分は見えていたのですけれども、だめだ、役に立たないと。ここは、もうこの場で決めるしかないという感じだったんですよ。

○質問者 わかりました。

次は、これもちょっとマスコミ的に、あるいは国民の関心があるところですが、総理が3月12日6時15分に班目委員長と原発に視察に行かれましたけれども、これはどういう目的で行かれたんですか。

○細野大臣 総理が現場に行くと言い出したのは、私もちょっと時間が正確ではないのですけれども、3月11日の多分夜遅くじゃないかと思うんですよ。もしかしたら日付が変わっていたかもしれません。私がまだ5階にいる頃なので、その後ベントする、しないの頃から [] 移りましたので、その前だったので11日のうちだったと思うんですよ。

なぜ行くと言い出したかという、やはり現場が分からないからです。直接聞いたわけではないのですけれども、中で総理が行きたいと言っているということをこそこそと耳打ちを受けて、ここはもう検証していただければいいと思いますので申し上げますと、私は反対だったんです。やはり指揮官が離れるということに関しては反対だったんですけれども、反対だということもそこで話し合ったときには言ったんですけれども、一方で絶対あの人は行くとは思ったんです、性格から言って。行くと決めたら行く人なんです。直接本人に行かない方がいいとは言いませんでした。もう絶対行くと思ったので。

【取扱い厳重注意】

結果としては、私は、仮にベントを遅らせることになっていなかったんだとすれば行ってよかったと思います。菅さんのその辺に対する評価は今非常に低いですけども、私は、あの人の当事者意識とか、ここを何とか乗り越えなければならないという、ちょっと非科学的に聞こえるかもしれませんが、気力とか、自分で何とかやるんだというその念の強さみたいなものは、特に3月の20日くらいまではプラスに働いたと見ているんです。

それは、やはり現地に行って現場を見て、自分の気持ちも、そこで腹を決めて、吉田さんとも話をして、それで固まったと思うんですよ。

○質問者 直接そういうお話をされましたか。帰って来られて、腹が固まったというよう

な。
○細野大臣 いや、もう見たらはっきり分かりますから。私も古い付き合いですから。古いと言っても十二、三年ですけども、見ていて、ものすごくあの人は苛烈な性格なんですよね。本当にここに決めたらみたいなどころがある人ですし、逆に関心がないことにはほとんど関心を示さないのですけれども、このことに関しては自分が何とかしなくてはならないという意識はすごく持っていましたよね。その総理のスイッチが入ったというか、それはあれだったと思います。

ただ、今から考えたらものすごく大きなリスクだったですね。万が一あそこで何らかの事故があったら、本当に本人の業務に支障を来すかもしれない、もしかしたらベントを遅らせたかもしれないというリスクがあって、私が吉田所長に一番初めに確認したかったのは、それだったんですよ。

私が初めてサイトに行ったのは、できるだけ私は行かないようにしていたので、だいぶ経ってからなんですけれども、5月の12日から18日に1泊サイトでしているんですけども、そのときに確認したかったことが幾つかあって、その1つがベントを遅らせたんじゃないかと。すごく私も止めなかったという自責の念もあったので確認したかったんですけども、彼は、少なくとも私に対しては、できなかったと言いました。私は、総理が来ようが来まいがそのときはベントはとてもしなかつたと聞いて、すごくほっとした覚えがあります。

○質問者 総理が海水を入れるのを止めるの止めないのという話が巷間出ておりますけれども、そのあたりの事実関係についてはどうなのでしょう。

○細野大臣 これはもう国会答弁のとおりです。

あれは12日の夕方ですよ。6時頃からですよ。この6時頃に海江田大臣が海水注入をしようということで入って、総理が再臨界の危険はないのかと言いだしたわけですよ。あのときは班目委員長が、可能性はゼロではないと言ったか、もしくは何でしたか。

○質問者 そういう趣旨だったですよ。

○細野大臣 そういうことをおっしゃったんですけども、可能性はゼロではないと回答があったとなっているのですけれども、私は、もうちょっと有り得るというニュアンスにとりましたね。正直驚いたんですよ。もう真水がなくなったらすぐ海水だというのは当た

【取扱い嚴重注意】

り前だと思っていたので、海江田さんが決めたらもうそれで入れるだろうと思ったわけです。ところが、総理が再臨界があるんじゃないかということを出して、そんなことがあるのかなと思って、専門家たる班目委員長が有り得るといふようなことを言ったものだから、すごく驚いたんですよ。まずいなと思ったんですよ。

それから、本当にあるのかなのかみたいな話になってしまって、このままだと延々とこの議論が続くのではないかと思ったので、私が本当にあるのかなのか検討してくれと言って、一回ブレイクしたんですよ。6時半頃やめているはずなのですけれども、それで1時間くらい議論して、それで入れるということになったんですよ。

なぜ班目さんがあんなことを言ったのかというのは、ちょっとそのときは不思議だったのですけれども、後からいろいろ本人の話もちよっと聞いたり、私も当時の状況を思い起こしてこういふことではないかなと思ったのは、当時もう総理も大変なことだということ、やはり表現が相当直截になっていたんですよ。班目委員長に「再臨界は本当にないのか」と聞いたんですよ。多分、班目委員長はその気迫に押されたんですよ。それで多分、ありませんとは言えなかったんですよ。でも、私は菅総理をずっと見ているから、菅さんというのは力が入っているときはそういう言い方をするのは当然だし、それはそのまま言い返せばいいだけで全然問題ないのですけれども、班目委員長は、菅さんのその対応に慣れていなかったもので、最高権力者にそこまで言われると、ちょっと確信がなければ、その気持ちが出た部分があったのかなというのが1つ。

もう1つは、これは私の本当に推測ですけれども、その前に水素爆発があったんですよ。水素爆発はないとはっきりと言っていたんですよ。水素爆発はないと言っていたのにあったので、班目委員長の中にはその辺の負い目みたいなものがあったと思うんですよ。確信を持って言うのはまずいというのがあって、それで、再臨界は有り得る、ゼロではないといふようなことを言ったのではないかというのが私の推測です。そのときに、本来は班目委員長が絶対で、我々は素人で、総理だって素人だ、こちらの言ったことが正しいということなのですけれども、関係が逆転していた可能性はあるんですよ。それでそういう表現になったのではないかと。

それで、いろいろ言われている、実は止めたんじゃないかとか、情報が官邸に入っていたのではないかということに関しては、これは断言できます。みんな海水は入っていないと思っていました。6時の時点でも。7時半の時点でも入っていないと思っていましたから。一回ブレイクして、7時半頃集まってそれで海水注入のゴーを出しているのですけれども、その時点でも入っていないと思っていましたから。私、本当に驚いたんですよ、5月頃吉田さんの話を聞いて。あれは、どこかが止めていたんですよ。要するに、吉田さんは本当に周辺だけで止めるジェスチャーをして止めていませんでしたね。東電は、止めたわけですよ。本店は止めろと言ったわけですね。止まっていなかったのだけれども、止めろと思ったわけです。

でも、止めろと言ったということは官邸には伝わっていなかったんですよ。東電の本店で

【取扱い厳重注意】

遮断していたか、もしくは東電の本店から来ていた武黒さん、■■■■さんが、これはやばいと、総理がここまで言っているのは、入れていたことは言わない方がいいと思ったか、どちらかですよ。

○質問者 付度しちゃったという話ですね。

今言われた、1時間のブレイクの間は、具体的には何をやっておられたんですか。海水の問題について。

○細野大臣 海水で再臨界はあるのかなのかという見解を整理していたと。

○質問者 具体的には、どういうふうに整理されたんですか。誰がどんな形で整理されたんですか。

○細野大臣 当時は、保安院と安全委員会がいましたから、一緒にやっていたか別々にやっていたかは分かりませんが、もう一つは、水素爆発というのがいま一つはっきりしていなかったの、水素爆発の経緯も検証しようという雰囲気であったんですよ。

何でそんなにのんびりしていたかという、多分お分かりにならないと思うのですが、海水が入らない状況だと。準備をしていたのだけれども、水素爆発をしているんな機器が潰れてしまって入らないところから6時にスタートしているので、まず入れることができないと思っていたんですよ。

○質問者 そうなんですか。

○細野大臣 そうなんです。だから、前提としては入らない状況なのだから、しっかり検討した上でやろうと。

○質問者 入らない状況なら、入れようと思ってもどうしようもないですね。検討した上で入るようにしようという。

○細野大臣 その頃に何かテストをして入る入らないという話を東電がしているというのは漏れ聞いていたので、7時半頃に私ができるかと聞いたら入りますと言うので、じゃあ入れようというのでそれでゴーを出したんです。

○質問者 そうですか。分かりました。

それから、次に国民に対する情報提供の問題ですね。これについては、官邸としては基本的にどんなスタンスでおられたんですか。

つまり、本当に正確な情報をリアルタイムでというか、起こったときにはすぐにやるんだというのか、パニック状態を起こしてはまずいとか、そういうことを配慮しながら、やはりある程度考えつつやらなくてはいけないのか、いろいろあるうかと思うのですけれども。

○細野大臣 分かっている事実を伝えようとは思っていました。それは、終始一貫していたと思いますね。ただ、情報が官邸もすごく限られていて、どういう表現を使って言うかというのは、枝野官房長官は相当苦労したと思いますね。

○質問者 例えば、直ちには影響はないとか、あれは枝野さんの発想の言葉なんですか。

○細野大臣 枝野さんの記者会見は、私、一回も見えていないんですよ。当初のものは。

【取扱い厳重注意】

毎日、日に何回もやっていますよね。あれは、一回も見ていないのでどういう経緯で「直ちには」とか言っていたのかはちょっと分かりません。

○質問者 そういうのは官邸内で議論されたわけではないんですか。

○細野大臣 いや、かなり分散化、集まって打ち合わせをして、また分散して情報を取ってまた集まってと暫時やっていたので、ずっと一緒にいたわけではないんですよ。ですから、枝野さんの記者会見がどういう準備の下でやられていたのかは、いま一つ分かりません。ただ、ものすごくクリティカルなことは話していましたよ。

例えば、1号機が水素爆発したときに、これは記者に発表しなければいけない、でも、水素爆発が炉なのか建屋なのかと。水素爆発は分かるんだけど、爆発したのはどちらなのかという話になって、炉なら大変なことなんですよね。その場合は放射線量が周辺で当然ぐっと上がるので、どちらか分からない中で記者発表はなかなかできないですから、どちらかと。そのときは、東電も多分サイトにもかけていると思うのですが、上がっていないという話だったので、現場も大混乱でしたけれども上がっていないという話だったので、これは炉ではないと。建屋だということだけは言わないといけないうりやり取りは、私なんかもしました。ただ、詳しくそれをどういうふうに表現するかとか、どういうふうに伝えるかということまでは私は打ち合わせしていないので、実際に枝野さんがその後、どういう発表をされたかを見る余裕はなかったんです。ですから、そこは見ていません。

○質問者 国民の皆さん方が、基本的な原子力とか放射能とかそういうものに対して知識があれば、それはいろんなことをストレートに全部説明して言ってもいいと思うのですが、そうでないときにありのままを仮に説明して、理解不足のために混乱とか、そういう懸念とかいうことは考えられてはいなかったんですか。

○細野大臣 もちろん、それは頭にはありましたけれども、どちらかという、できるだけ早く伝えることと正確さをどう両立するかということに注力しておりました。

ですから、爆発がありましたということだけ伝えるのは、確かに速報性はあるのだけれども、その爆発がどういう爆発かで、どうしなければならないのか、建屋なのか炉なのかということをお伝えしないと、これはもう正確性においては初歩的なあれになるわけですよ。多分、それで30分くらい遅れているんだと思うのですが、やはりそこくらいは確認しないと報告できないだろうというやり取りはしていましたね。

なぜそこで正確性をより重視したかという、爆発しましたということだけ言うと、大変ですということで皆逃げますよね。下手すれば東京の人も逃げてしまうかもしれない。それは、考えました。

○質問者 これもちょっといろいろ議論になっている、保安院の中村審議官が3月12日に炉心溶融を起こしている、可能性があるという会見をして、その後だんだんトーンが落ちてきて、これは、官邸の方からそういう発表をするときは擦り合わせしろとかという話があったとか、なかったとかという話があるのですが、事実関係としてはどんなことがあつ

【取扱い嚴重注意】

たのでしょうか。

○細野大臣 ちょっとそこは私も分からないんですよ。中村さんとはその後またいろいろと一緒に仕事するようになったので、この人が初め記者会見していたんだというのはその頃知ったので、ですから、5月に入ってからですよ。

ただ、当時記者会見していたのは、多分東京電力と保安院と官邸だったと思うんです。文部科学省は初めしていなかったと思うんですよ。3者がそれぞれ情報共有をせずにやっていて、バラバラじゃないかみたいな問題意識は出ていたかもしれません。だから、ちゃんと正確にやろうという話は出た可能性はありますね。

ただ、私の関わりは、記者会見でどう発表するかというよりは、原発の中をどうするかということの方だったので、いま一つ分からないんですよ。

○質問者 今の、中の話で、まさにメルトダウンというか炉心が溶けているかどうかという懸念と言いますか、それはいつ頃、日々接しておられて、例えば3月11日から12日の間に、ここまでは行っているのじゃないかというのは。

○細野大臣 当時、水があと何時間入らなかつたらそれこそ圧力容器が損傷するのとか、そういうのは言っていましたね。

ただ、一方で1号機がまさに非常用復水器の水が入っているか入っていないかで混乱があったのですけれども、11日から12日にかけて。

○質問者 動いているかどうかの問題もありましたね。

○細野大臣 ええ。初めは、ベントは2号機だと言っていたんですよ。ところが突然1号機に切りかわったのは、実は非常用復水器が動いていなかったという話になって大慌てで1号機になったのですけれども、水が入っているか入っていないのかがそれぞれ分からなかったの、あと何時間やったら燃料が溶けるとか格納容器が破断するとか、確かにしたんですけれども、それがどの号機にどの時間に当てはまるのかということを整理をした情報は誰も持っていなかったと思うんですね。入っているか入っていないかがそもそも余り分からないので、正確に何時から何時までというのは把握できませんでしたから。

そういう話はしていましたよ。何時間くらい入らなければどうなるんだみたいな話はしていたのですけれども。

○質問者 例えば線量が異常に高くなっていて、それは炉心が溶けていることの一つの証左であるかもしれませんが、そんなところから、溶けているのではないとかそういうのは。

○細野大臣 燃料が溶けているだろうということは思っていましたね。ですから、溶融しているというのは認識していました。

○質問者 それは、いつ頃ですか。

○細野大臣 ですから、12日の朝、手動のベントで、東電が決死隊を作りましたよね。12日の朝方ですね。あのときにはもう放射線量が上がっていましたからね。あのときにははっきり認識していたと思います。燃料が溶け始めているということはですね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 ちよっとくどくて恐縮ですけれども、当時の補佐官はもうそういう認識を持っておられて、また中村審議官もそういう認識で多分記者会見されたと思うのですけれども、それがトーンダウンしてきているところを見ますと、どうも正確に伝えようという政府の方針がきちんと出ていないと国民は、特に後から見ると、メルトダウンを起こしてたじゃないか、やはり違っていたじゃないかという疑念をいまだに持っているわけですよね。

○細野大臣 全体として言えることなんですけれども、INESの評価も含めてなのでけれども、スタンスとして分かったことを正確に伝えようという雰囲気ではあったんですよね。逆に言うと、分かっていないことをそうかもしれないというふうには余り言わないと。ですから、本来あるべき本当の意味での正確な情報発信というのは、おおよそこういうことだろうと考えられるという全体の絵があって、ただ、不確定要因もある、と言えば一番いいのですけれども、正確な情報、分かったことを話そうということだったので、溶融はしているんだろうけれども溶融の程度は分からない、これが分かっていることなんですよ。

でも、その状況証拠からして、放射線量も上がっているし、水が入らなかった時間も正確には分からないけれども相当長かったということになれば、溶融の程度は相当大きいと。炉心溶融の可能性もあるけれども分からないと説明するのが多分正しいリスコミュニケーションだったんでしょうね。

○質問者 そうですよね。ですから、国民の目から見ると、小出しにされているのではないかと、正確に伝わっていないのではないかと、そういう見方になってしまうだろうと思わすけどね。

○細野大臣 当時、会見のやり方ということには私は余り関与していなかったのですけれども、雰囲気としてあったのは、分かった事実をできるだけ正確に話そうということでした。そのずっと後になって、4月の後半になってから私が会見するようになったのですけれども、その頃からは少しずつ全体像が分かってきていたので、私が心がけたのは、正確に分からなくてもおおよそこういうことではないかというのは、議論をしまさず全体像を話そうと。個別にはこうだと。例えば作業員の放射線量がこれくらいになっているという1人のデータが出てきて、例えば50ミリを超えた人が1人出てきたとか、実はもっと高かったとか、1人出てきたということは、1人出てきたのではなくてそういう人が何人いるだろうと。分かっているのは1人ですという発表の仕方をするようにしたんですよ。ですから、そこは、小さく見せようと言うよりは、本当に分からなかったで、分かったものを積み上げて、それを出していこうという発想に特に当初は立っていたと思いますね。

○質問者 分かりました。

あと、私からの最後の質問をさせていただくのですが、6月に海外に説明に行かれましたですね。これは、もちろん説明ですから、目的は説明が目的なのでしょうけれども、行かれたのはイギリス、アメリカ、フランスでしたでしょうか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 近隣の、例えば中国とか韓国とかは、これはどういうふうにしたのですか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 中国、韓国は、人をしばしば送ってきていたんですね。韓国は JNES に、JNES とは保安院の独法なのですけれども、そこに KINS という向こうの JNES のカウンターパートの人を送って来ていましたし、中国は、ほとんど具体的に何か情報を取りには来なかったんです。

2つ意味があって、英米仏に行ったのは、この3か国はいろんな技術協力をしてくれたので、そこに対するお礼と、あとは、これはちょっと国益上余り記録には残したくないので。

○質問者 ちょっと止めてください。

(以下、レコーダーデータ②)

○質問者 そうしましたら、また、時系列最初の方に戻りまして、3月11日のところから若干補足してお尋ねしたいと思います。

○細野大臣 お願いします。

○質問者 先ほどのお話ですと、11日の15時頃までに議員会館の方から官邸の方にお戻りになられて、お戻りになられてからまず5階の執務室の方に行かれたんですか。

○細野大臣 補佐官室というのは、官邸の中で言うと総理室があって、その反対側なんです。総理の秘書官室というのがあるんですね。そこは総理の執務室の隣なんです。そこが、補佐官の実際の寄り合い場所みたいにもなっていて、秘書官ともものすごく親しくなりますから、5人か6人いるのですけれども、そこに行っていました。

○質問者 そちらの方にしばらくの間はずっと詰められているという状況なんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 それで、最初は、そこでどのようなことをされていたんですか。

○細野大臣 そこが、その後が本当に、海江田大臣が来てからが大変だったので、いま一つ覚えていないのですけれども、いろんな情報が錯綜していて、特に地震が来て、すごく大きな地震だということもあったのですけれども、津波が来るというので、警察なり自衛隊を出すとか出さないとか、果たしてどれくらいの規模なのかとか、自治体と連絡が取れないとか、そういう話が錯綜していたので、寺田補佐官と私とでそういう交通整理をしていたというか、情報を整理して総理に上げなければいけない。どうやって情報を整理するか、ものすごくいろんな情報が飛び交っていたので、そんなことをやっていました。ですから、その時間、1時間か2時間くらいですか。海江田大臣が来るまでに。

○質問者 海江田大臣が来られるというのは、先ほどの上申の手続で来られるということですね。それが17時42分ですね。ですから、そうすると2時間ですね。

○細野大臣 そうですね。2時間あったんですね。そこは、全体を把握することができるかできなかったかくらいのタイミングだったので。

○質問者 総理の執務室の方に、例えば総理が情報を収集するために保安院の関係者であるとかあるいは東電の関係者なんかを、その頃、つまり海江田大臣が来られるよりも前の

【取扱い厳重注意】

段階でお呼びになられたかどうかということについては、御記憶何かありますか。

○細野大臣 いや、呼んでなかったと思いますけれどもね。

○質問者 先ほどお名前が出た武黒さんとか■さんとか、その方々と最初に接触されたというのは、御記憶ではもう少し後ということですか。

○細野大臣 後ですね。海江田大臣が来られて、どういうことなのかという情報が限定されていたので、誰か呼ばなければならないという話になって、それから2人が来たんだと思います。2人プラス随行の若い方が何人来ましたけれどもね。

○質問者 最初に会われたのは、どこでお会いになられたという記憶ですか。

○細野大臣 官邸ですね。

○質問者 官邸の総理の執務室の中ということですか。

○細野大臣 総理の執務室があって、秘書官室が横にあって、その横に大部屋があるんですよ。応接の大部屋が。でも、あのときはまだ開いていなかったかな、ちょっと正確に記憶がありませんけれども、総理はすぐに聞きたがったので、東電の2人が来てすぐに一回執務室に入っていると思います。余り正確ではないかもしれませんが。

ですから、私がこの2人から話を聞いたタイミングと総理が聞いたタイミングは、ほぼイコールではないかと思えますけれども。

○質問者 そうすると、その初期の頃に保安院の寺坂院長が総理の5階の方に上がってこられたかどうかということは、御記憶ありますか。

○細野大臣 海江田大臣と一緒に寺坂さんを連れて来ていませんでしたか。誰かと一緒に来たんですね。それで、寺坂さんだったか、あとは、次長が、今現地対策本部にいる平岡さんか。初めは寺坂さんだったんでしょうね。

海江田大臣より前にですか。ちょっとそこは記憶がないですね。総理が原発は大丈夫かみたいなことをちょっと言ったかもしれませんが。

○質問者 その前の段階では、海江田大臣が来られる前の情報収集なんかをされている頃は、総理の執務室に菅総理はおられたんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 総理の執務室と、情報が入ればそれを伝えるに行くというような感じで往復をされていたという感じなんですかね。

○細野大臣 私ですか。

○質問者 はい。

○細野大臣 総理と個人的に一番親しいのは寺田補佐官なんです。寺田補佐官が一番そういう役をやっていたんだと思います。私は、どちらかと言うと秘書官の人たちと、津波とか地震とかでどうなっているんだみたいなことでやっていたような。すみません、本当にそこは曖昧です、正直言うと。

○質問者 当初は、海江田大臣が来られる前の頃というのは、役回りとして寺田補佐官は、どういふことを担当する、細野補佐官は、どういふことを担当する、というような役割分担み

【取扱い厳重注意】

たいなものは。

○細野大臣 それはありませんでした。

○質問者 その時点ではまだなかったと。

○細野大臣 ありませんでしたね。

○質問者 先ほどの、炉のことだとか、福一のプラントの中の対処なんかについて担当すると決まったというのは、いつ頃になりますか。

○細野大臣 海江田大臣が保安院のスタッフは連れてきたんですけども、政務三役は誰もついてきていなかったの、海江田大臣は相当その時点で大変な状況だという印象があったんですね。寺田補佐官と私とで話をして、これは3つ重なっているから、津波と地震と原発と分けようという話を、どちらをするかという話になったんですよ。これは、総理から指示されたわけではなくて、我々2人で。

それで、たまたま私が割とエネルギー政策をやっていたので、寺田君が、細野さん原発をやってくださいと言ったので、私もその方がいいかなというのは直感的に海江田さんの姿を見ていて感じたので、それで私は原発、寺田君はどちらかと言うと津波という役回りにしました。11日の何時頃かは分からないですね。ベントするしないというときには、そういう役割分担をしていましたので。

○質問者 原子力緊急事態宣言の発令が19時8分ということで、その後、原災本部の会合の第1回が20分弱くらいあったようですけれども、その頃はまだ決まっていなかったのか。

○細野大臣 その頃ではないですね。その後だと思いますね。

○質問者 その後、21時23分のところに、こちらの方で作成した時系列で書いていますけれども、福島第一原発から半径3キロ圏内の避難と、あと10キロまでのこれも避難ということが決まっておるようですけれども、当然この前の段階で官邸の方で話し合いがなされていると思われるのですが、その頃はもうすみ分けというか。

○細野大臣 その前後だと思いますね。このときは、3キロと3～10キロのこの話は、保安院と安全委員会に、念のためということも含めてどれくらい危ないんだという話をかなりしていたんですよ。

○質問者 菅総理もその場に入られていたのですか。

○細野大臣 最終的に決めたときは多分入っていたと思います。これは、総理指示ですからね。やっていたのは、政務で言うと総理と枝野長官と福山副長官と海江田大臣と私。寺田補佐官も一部入っていたかもしれませんが、寺田補佐官はどちらかと言うと津波の話をしていたので、それくらいのメンバーですね。

○質問者 役人側の方は保安院で、危機管理監とかは。

○細野大臣 危機管理監は常にいました。おられたと思います。

○質問者 そのときは、話をその場で中心になってされる方というのは、政務側と役人側ではどなたとどなたということになるんですか。それとも、そういう誰かというよりも意

【取扱い嚴重注意】

見のある人がどんどん言い合うというような感じになるのか。

○細野大臣 決定は、全体として言うやはり枝野長官がしていましたね。枝野長官がして、最後は総理が判断する。総理が全部、では3キロにしようなんて言えないから枝野長官が決めていました。場の司会を誰がやっていたかという、私がやっていたかもしれませんが。ある時期から、みんなそれぞれ、知りたいじゃないですか。どういうことなんだみたいな話になるのですけれども、確かに事実を把握しないと物事を決められないのですけれども、余り細部にわたって知っても判断に影響しないじゃないですか。判断に影響しない議論になってしまうことが結構あって、総理も若干そういう傾向があるし、みんなそうなるんですよね、そういうときというのは。

それで、ちょっとそういう話はやめようと。最大で何キロ危険なのかみたいな仕切り役を誰かがしなければ前に進まない雰囲気だったので、私は補佐官なのでちょっと違うのですけれども、例えば総理の言っていることを遮ったりとか、説明が長いともっと短くしてくれとか、そういうことをやっていたのは私なんです。

ですから、このときあたりから私がやっていたかもしれません。

○質問者 このときは東電の武黒さんなんか参加をされているかどうかというのは、御記憶は。

○細野大臣 この前後ですよ。ただ、東電の人間は、この決定には携わっていないと思います。勿論、情報は提供していたかもしれないけれども、この判断は政府の判断ですから、そこに東電の人間も意見を言うとかいうことにはなっていないかと思えます。

○質問者 ちなみに、このような福島第一原発から半径何キロ圏内は避難であるとか、屋内退避というような話し合いになるということは、この時点で福島第一原発の方で近い将来何か危険なことが起こるかもしれないという予測が立ったからということですよ。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 そうすると、ある程度の情報があって、その情報に基づいて将来どういったことが起こるかもしれないというような危険の予測というのは、当時どんな予測をされておられたんですか。

○細野大臣 原発のことを多少でも知っている人間だと、水が入らないというのがどれくらい危険なことかということは分かるわけですよ。それは、私ですら分かりました。総理もすごくそのことには危機感があって、大変なことになるぞというふうには思っていたんですよ。

○質問者 当時は、恐らくこの21時の頃というのは、こちらの16時36分のところで15条事象発生ということで、その後15条通報と、要するにここに書いてあるのが、1号機で言えばIC、2号機で言えばRCICについて、それが動いているか動いていないかがよく分からぬ、水位も見えないというところから、このような通報をなされたというようなことを吉田所長がおっしゃっておられるのですが、そういう状況ですと場合によってはICが動いていないかもしれない、RCICも動いていないかもしれないというような情報、その程

【取扱い厳重注意】

度の認識はあったと。

○細野大臣 そうですね。それはありましたね。ですから、動いているか動いていないか正確に分からない状況になっていて、動いていない可能性があるのではというような説明を海江田大臣もしていましたから。そういう種類ですね。海江田大臣がしていたか、寺坂さんがしていたかは分かりませんが、そういう説明は私も聞いたので。

○質問者 仮に動いていないとすれば、いつから動かなくなったのかという問題もありますけれども、例えば16時36分の段階でもう既に動いていなかったとすれば、そこからもう4時間、5時間という時間が経ったということになりますので、相当もう炉心も露出して、先ほどの溶融ではないですけれども、相当程度進行している可能性も出てくるということになると思うのですけれども、この頃なんかは、その避難の話をするときに、またそれと併せてベントのことだとか、そういう議論なんかは。

○細野大臣 この頃は、もうそろそろ出ていたと思いますね。ベントの話は11日のそんなに遅くなる前に出ていたんです。もう1つ並行してやっていたのは、電源車を集めようという話で、それは自衛隊とか米軍まで連絡したりして、ヘリで吊ってこれられないかとか、道路はどこが寸断されているかとか、全国の電源車はどこにあるのかみたいなことをやっていたんです。

ですから、深刻さは分かっていたのですけれども、とにかくこれ以上エスカレートさせないためには電気をつなぐしかないということだったので、そのことがメインだったと思いますね。

○質問者 電源車について自衛隊なりなんかに空輸というか、そういうことをお願いしようだとか、そういう手配なんかは、官邸の5階ですと、政務の方と保安院の方とか班目委員長だとか、そういう方が普段おられて、そういう防衛省との間の取り次ぎとかいうことはどうの方が。

○細野大臣 秘書官がいますから。主要なところは秘書官が各省から来ていますから、そのあたりが窓口になっていましたね。

○質問者 あとは、こういうベントの話だとかということになってくるともう武黒さんとか、そのへんも参加してと。

○細野大臣 そうです。

○質問者 そのときに初めて、先ほどのお話ではないですけれども、東電の方々と直に触れ合う機会ができて、そのときに、最初の頃、何かベントに躊躇しているのではないかというような印象というのは受けられましたか。その武黒さんのしゃべり方や振る舞いとか。

○細野大臣 いや、深刻でしたから、当時は、班目委員長もベントしかありませんと言いついていましたからね。11日の夜に。

ですから、逆にできなかったのが意外だったんですよ。ベントというのは、緊急事態としては圧力を逃がす作業としてやることになっていると聞いたので。記者会見をしたのは

【取扱い厳重注意】

ちょっとそれから経ってからだったので、いよいよやろうということになって、小森さんまで来て記者会見をやったわけですよ。当然すぐできると。これで最悪の事態は免れて、圧力も抜けるから水も入り易くなると思ったんですよ。逆に言うと、そう思っているということは、当然入れるだろうと思っていたということですから、余りそういうふうには思いませんでしたけれども。

○質問者 先ほど、東電の方というのは、当初の印象だとどうも海水を入れることについてちょっと躊躇していると言うか、そんな印象をお持ちになられたようなことをおっしゃられておりましたけれども、具体的には、どんな言い方をしているというか、どういうところからそういうふう感じられたのでしょうか。

○細野大臣 夜、ベントの記者会見をやって、これでベントができると結果を待っていたんですよ。2時から3時頃ですね。そのときは、これでベントができる、いい報告があるといいなと思って待っていたので、そのときに少し時間があつたので、今は真水がありますけれども、なくなったらどうするんですかみたいなことを言ったら、いや、真水の方がいいんですよ。勿論、炉も傷めないのだけれども、万が一、例えば廃炉にするにしても塩水だと大変なんだということ言っていたので。それは割と落ち着いた会話の中での話です。

ベントはやろうということになったのですけれども、ベントは東電が嫌がっているんじゃないかみたいな話は、その夜中あたりからちょこちょこ入って来て。

○質問者 それは、どういうところから入って来る情報なのですか。

○細野大臣 それはちょっと、正確に私のところに入って来ている情報ではないので、海江田大臣の方に入ってきていて、それで実際にベントができていなかったものだから。その頃多分、東電の中では、避難している人がいるのだからベントはいつ頃のタイミングだという議論していたんじゃないですか。そのことは、私は知らなかったんです。

○質問者 このベントについては、もう、11日の夜頃からそういう話には出ていて、実際に、確かに3時過ぎ頃に経産省の方で海江田大臣と小森さんが共同記者会見をやられておられますけれども、その前の段階で、例えば東電なんかが発表している時系列なんかによると、菅総理大臣や海江田経産大臣、それから保安院の方にベントの了解を得たというのを1時30分頃だというふうにされているようなのですけれども、実際に例えば武黒さんなんかが、実は今こういう方向で、具体的には1号機を優先にして、ただ2号機の方も安穩とできない状況なので2号機も視野に入れつつ、1号機及び2号機についてベントを実施したいというような東電側の方針なんかを、5階の応接室なんかで明示的にそういう話があったかどうかというのは。

○細野大臣 そのときに上に上がったかどうかは、ちょっと余り覚えていないのですよね。
海江田さんに、ではここから行ってきてくださいと言って送り出して、記者会見が終わって帰ってきたのを覚えているので。

【取扱い厳重注意】

1時頃にそういうやり取りをしたかどうかは、総理の決裁を仰いでいるのですけれども、みんなで上に行って決裁を得たかもしくは、ちょっといま一つ記憶は定かではありません。ただ、当時は、ベントは2号機だったんですね。

○質問者 もともとは。

○細野大臣 はい。1時台はまだ2号機だったんです。突然、記者会見の直前かなんかにRCIC、非常用復水器が動いていないと言うので1号機に切りかわったんです。それは、私すごく深刻だなんて思って、ベントをどちらにするかなんてものすごく機微に触れる話ではないですか。大事な話じゃないですか。そのことが突然2号機から1号機に変わって、1号機が実はより深刻だったなんていうことがその直前に分かっているというのは、いかに状況を把握できていないかという証拠ですから。

○質問者 15条通報で0時57分、1時ちょっと前ですけれども、格納容器の圧力が異常上昇したと。内容としては、1号機について福一の方で計測したドライウェル圧力が1号機が600を超えているということをもって、若干通報が遅れているんですけれども、0時57分に通報しているみたいなのですが、このあたりで1号機の格納容器がここまで来ているというのは、1号機の方がむしろ危ないのではないかみたいなそんな議論というのは。

○細野大臣 当時は、そんなに全部整理して情報をみんなが把握していたわけではなかったのですけれども、2号機がもう夕方くらいからちょっと危ない危ないという話だったんですね。1号機もそうだと。これはベントしなければならないというふうになったんですけれども、その1号機の確かに通報があつて、よりこれは水が入っていないということは確かに分かったんですけれども、それで、では1号機にベントを切りかえるというような議論にはならなかったんですけれどもね。

○質問者 2号機の方が1号機よりも優先するというふうな話になっていたのは、これは何が原因というか、どちらも水位がまず見えていなかったと。恐らくICが動いているということもきちんと確認は恐らくなされていなくて、現実には動いていませんから、確認をすれば動いていないことが分かるというだけなので、確認も取れていなかったはずなんですけれども、ICとRCICが動いているか動いていないかよく分かりませんと。実際のところは、水位が21時から22時の間くらいに、1号機については水位がTAFプラス450だとか500というのが判明して、22時頃に今度は2号機の方でTAFプラス3,400くらいあると。そこで、現場の方では2号機よりも1号機の方が危ないのではないかという。

○細野大臣 それは何時頃ですか。

○質問者 これが、11日の22時頃です。

○細野大臣 では、その時間に分かっていたんですね。

○質問者 吉田所長は分かっていた。

○細野大臣 官邸では分かっていたいなかった。

○質問者 そこまでは来ていなかったということですかね。

○細野大臣 来ていなかったですね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 一応、これらの情報は、15 条通報の書式で保安院の方にも送られて、それについては地下の緊参チームのところにも全部入っていることについて、私確認しているんですけど、それが上までには来ていなかったと。

○細野大臣 [REDACTED] 紙は、私も一回も見ていないんですよ。

だから、保安院の中でいろいろやり取りをされていたりはしたのかもしれないけれども、関心事はベントをするのはどの号機であるかだったので、より深刻なのはどこだという話で、2号機がベントだというので、多分午前2時頃までは海江田さんと私の認識は揃っていたと思いますけれどもね。

ところが、記者会見をする寸前になって1号機だという話になって、小森さんはそういう発表をしたんです。海江田さんもそういうことらしい、そういうことなんだということだったので、その時点までは余り正確にそういう情報を共有されていなかったと思います。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 はい。いました。[REDACTED]さんもいましたね。

○質問者 そこで控えていて、そこではどういう話を。そこでまた、いろいろと今後の予測だとかもろもろとお話をされていたということですか。

○細野大臣 していましたね。

○質問者 場所を移ったのは、これはなぜ移られたんですか。

○細野大臣 先ほどもちょっと申し上げましたけれども、まず電話が繋がらないというのはものすごく不便だったんですね。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 はい、そうです。一切電話が繋がらないんです。5階と調整するときは一々伝令を走らせる。[REDACTED]

[REDACTED] 行き来をしなければならぬという状況だったんです。私が上に行ったときもありましたけれども、秘書官に走らせたりしていたので。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 地下にいました。

○質問者 [REDACTED]

○細野大臣 [REDACTED]

【取扱い厳重注意】

■
ところが行ってみると、電話はつながらないし情報もほとんどない。東電からの情報が唯一の情報みたいな感じでしたから、それで、上に上がったんですよ。

○質問者 同行されている方も含めて恐らく4名くらい来られていたと思うのですけれども、その頃、東電の武黒さん以下の方々は、東電から直接携帯電話か何かで、上かどこかつながるところに行って連絡を取られておられたんですか。

○細野大臣 もうしょっちゅう取っていました。終始やっていましたね。現場とも連絡を取っていたんじゃないですか。

○質問者 1Fの方と。

○細野大臣 はい。

○質問者 それで、順番に行きますと、3時頃に共同記者会見をやって、実際は武黒さんもそんなにベントを嫌がっているような状況ではないので、すぐにできるだろうというふうに思われていたところが、なかなかベントをやったという報告は来ないというところで、またどうなっているのかというときに、現場やあるいは東電の方に、例えば武黒さんに電話をしてもらって、そこから情報収集を図るというようなことはされていたんですか。

○細野大臣 やっていました。何で入らないんだという話になって。

記者会見が3時頃ですよ。それで、これでベントができるようになってちょっとよかったという雰囲気だったところが、いつまで経っても報告がないので、多分1時間くらいそういう話が来なくて、何でできないんだという話になってきたんですよ。かなり緊迫してきたわけですよ。圧力が上がっているという話だったし。そうしたら、多分4時半とか5時頃だと思うのですけれども、私がちょっと気になり出したのは、総理が現地に行くこと。

○質問者 その話はいつ頃から。

○細野大臣 前の日の夜ですね。11時とかだったと思いますけれども、それが頭にあったので。総理が行ったのが6時ですよ。

だから休んでもらってたんですよ。総理には。寝ていたかどうかは分かりませんよ。総理には休んでもらった方がいいという意識だったので、とにかく我々は総理のところへ飛び込まないようにしていたんです。その間は。

○質問者 執務室の方でお休みなられていたと。

○細野大臣 執務室の奥で休んでいたんだと思いますけれども、正確にはちょっと分かりません。

それもすごく気になっていたし、そもそも1時間以上ベントができないというのも、これまでの説明ではあり得ないことだったので、何でやれないんだという話になったら、何度か電話をしたりして、何で分からないみたいな話から、線量が上がったので手動のベントができなくなったと言うので、本当に危ないと思ったんですけれどもね。

○質問者 それは、武黒さんたちの東電情報としてそういう情報を把握されたということ

【取扱い厳重注意】

ですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 それで本当に危ないとなって、その危なさが解消されることが確認できないところで、総理ももう行くということで行かれるということになるわけですね。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 その前の段階のところ、また避難の話なのですけども、先ほどの3から10キロ圏内が屋内退避であったものが、5時44分のところで、10キロまでが避難をする、場所的にも移動するというようなことで指示が出ているみたいなのですけども、これについて別途5階の方にみんなが集まって、また同様の菅総理以下の官邸の政務の方々と役人の方で話をされるというようなことはあったのですか。

○細野大臣 あのと時10キロに拡大していますよね。これは5時44分ですね。これですよ。このときかなり緊迫してきていて、圧力は高まっているし3キロでは収まらないかもしれないみたいな話を地下で、そのとき[]に班目さんもいたんです、していたんですよね。それで、当然最後の判断は総理の決裁も仰いでいますけれども、その前に官房長官の決裁も仰いで、総理もあのと時地下に来たのかもしれないですね。地下に一回来たのか、行く前に。

○質問者 []

○細野大臣 []

○質問者 それで、それから30分くらいで出発されるということになるんですよね。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 いずれにしても、[]

[] 1号機の状態が非常にまずいというような話なんかがかきかけで、ちょっと広げるという話になったんですか。

○細野大臣 そうですね。3キロでは収まらないかもしれないという話になったので、それで10キロにしたんですよ。

○質問者 このとき政務の方でおられた方というのは、この意思決定のところに関わられた方というのは、総理と官房長官はそうなのでしょうけれども、ほかには、細野大臣以外はどのような方が。

○細野大臣 海江田大臣は関わっていると思います。海江田さんと私は必ずセットで動いていましたから、当時は。福山副長官も関わっていると思います。大体もうそのセットだったんですよ。最終判断は総理、実務的な判断は、枝野官房長官、福山副長官、海江田大臣、私が入って、寺田君が総理との関係でいろいろ出入りをするという感じでした。

○質問者 それから総理が行かれて、恐らく総理が福島の方に行かれている間に今度は福島第二原発が緊急事態宣言を発令するとともに、またちょっと1号機の後追いのような形で3キロから10キロ圏内が屋内退避というような形で避難区域の設定なんかをされているようなのですけれども、この議論なんかは、もともとこの話が出始めたのは菅総理が行か

【取扱い厳重注意】

れた後の話ですか。

○細野大臣 そうなんです。これはですね、決定自体は第一原発でやっているのと同じことだったので、第二もそういうことになった、まずは3キロだというのは、パパパッと情報を共有して議論もせずに決めたのは決めたんですよね。この決定は、総理のヘリに電話をしているんじゃないかな。一回ヘリに電話したんですよね。ヘリの中に緊急電話みたいなものがあるんですよ。自衛隊のヘリに。

○質問者 それで連絡は取れて。

○細野大臣 いや、これはちょっと不確かですね。ちょっと定かではありません。ただ、この第二の決定は、もう第一がもっとシビアだったから、そうなのか、ではそちらもということで、しかも3キロという範囲だったので、1号機の10キロという方がはるかに深刻だったので、さっと決まったのだけはよく覚えています。

○質問者 それで、現地にいる総理にいずれかの手段で連絡を取って、最終的な決裁をいただくというような形になるわけですね。

○細野大臣 はい。そうですね。ごめんなさい、電話は定かではありません。

そうか、このときはもう着いているんですよね。ヘリにいるときに電話しようと思ったけれどもつながらなかったか何かで、現地に着いたらすぐに判断をしてもらおう、そういうオペレーションをしたのかもしれない。ちょっとそれは、直接私はやっていないので。

○質問者 それで、総理が官邸の方にお戻りになられたのは、いつ頃だったという記憶ですか。福島第一原発自体は8時過ぎに。

○細野大臣 確か、一回空中で被災地の津波のところを見て回っているんですよね。

水素爆発よりは前ですよ。

○質問者 水素爆発ですと、もう15時36分ですよ。

○細野大臣 それよりは前ですね。原災本部をやっていますね。この原災本部は総理がいるときやるかやらないかで議論して、帰ってきてからやったんですよね。3回目の原災本部をやっていますから。このときは総理は帰ってきているはずですね。

○質問者 総理がおられない間というのは、どういうことをされていたんですか。

○細野大臣 いや、これはもうベントですよ。1号機のベント。決死隊を作れと。それは、東電としては社員を守りたいし危険なところには行かせられないみたいな話があったのですけれども、ベントができなかったら大変だというのは共通認識だったので、決死隊を作ってもやってくれと。今そこに人はそれしかいないので、具体的に班分けして、アラームを付けて行っているはずで、たしか。1班から行って、1班は上手くいった。2班はちょっと回して、3班は空振ったとか、途中で帰ってきたとか、そういうのをたしかやっていますか。

○質問者 はい。9時以降ですね。

○細野大臣 はい。

【取扱い厳重注意】

○質問者 武黒さんなんかは、携帯でつながらないわけですよ。どうやっていたのですか。

○細野大臣 それは、下の人が電話をしていたか、PHS はつながったのかな。中では全然つながらなかったんですよ。外に行って情報を取って戻ってきて、一々報告していましたね。

○質問者 そうすると、東電の人間がそういうことをずっと情報を取って来て。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 それで、結局9時過ぎからそういうことをされているみたいですが、10時くらいまでの間に結局線量が高いということで、2班、3班あたりまでいくと上手く行けずに引き返してくるような形になってしまって、結局問題としては、中の線量が高いので現場に行って開けるのはちょっと難しいということで、その後、もう外からコンプレッサーで圧を送って開けるしかないのではないかとというようなことなんかには走っていったみたいなのですか、そういうその具体的なオペレーションというか。

○細野大臣 全部聞いていました。

○質問者 そういうのも入っていたのですか。

○細野大臣 聞いていました。当時は、2つ弁があって、バルブが2つあって、1つ目のバルブは手動で開いたのではなかったですか。2つ目が電動で開かなくて、それをどうやって開けるかでまたやっていたんですよ。いろいろ方法を考えますとか言って。

○質問者 それは、もうリアルタイムでそういうような情報は入ってきていたと。

○細野大臣 はい。入っていました。

○質問者 その頃というのは、要するに作業状況が全く分からないからいら立ちがあるという感じでもないんですか。

○細野大臣 途中から入るようになってきたんですよ。初め、空白の1時間くらいがあるんですよ。3時から4時半とか5時頃までか、ちょっと正確には分かりませんが、その間になぜ入らないか分からなくて、躊躇していたのかもしくは入れられなかったのがちょっとよく分からなかったです。それからは、決死隊を作ってでもやってくれと。

○質問者 それ以降は、比較的情報が入っているということなんですか。

○細野大臣 そのベントの件はですね。

○質問者 注水の方の情報なんかは入ってきていましたか。要するに、消防車を使って入れているということは。

○細野大臣 それは入っていました。

○質問者 当然最初は、防火水槽なんかの真水を入れているみたいなのですが、それで結局水が欲しいということでいろんなところから水の要請を、東電の吉田所長や本店なんかでされているようなのですが、そういう水の手配なんかには細野大臣は関わられて、例えば自衛隊なんかも給水車を18日くらいに送っているみたいなのですか、そういう水の手配なんかに関与されたことというのはございますか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 当時私がやったことは、東電から要請があったら全部それは自衛隊の秘書官とかに伝えたりとかして、やってくれということは全部やっていました。電源車のこととかもそうですけれども、別に自分で大臣に電話するのではなくて、秘書官を通じてでしたけれども、それはもう東電に言われたことは全部やっていました。ちょっとこれはオフレコにさせていただいた方が、ここだけ止めていただけますか。

(以下、レコーダーデータ③)

○質問者 東電に決死隊を作れというふうに、これは具体的には武黒さんなんかにおっしゃられていたということになるんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 そのときの武黒さんの反応は、作業員たちの身の安全であるとか、そういうことなんかも考えなければいけないのですぐにはできないというような反応だったんですか。

○細野大臣 いや、一瞬躊躇はあったと思いますけれども、作ってもやりますと彼は言っていました。多分、現場もすぐに作っていたんだと思います。

○質問者 ただ、それがなかなか遅々として進まないという現状から、ためらっているのではないとか本当に行くのかと不安になってこられていたということなんですか。

○細野大臣 社としてためらっているというよりは、民間人がそこで本当に行けるのかなというふうに思ったんですよ。

○質問者 できませんとか、そういうようなやり取りがあったということではないと。

○細野大臣 だから、初め線量が上がってきたので行くのが難しくなりましたと言うから、そんなことはあり得ない、だったらもっと早く行けたはずではないかみたいな話になって、決死隊を作っても行ってもらわないとこの事態を乗り越えられないだろうという話になったんです。

○質問者 武黒さんがそれを本店の方に伝えているかどうかというのは分かりますか。その決死隊を作っても行けというふうに、例えば目の前で電話をかけてもらったとか。

○細野大臣 それはしてませんね。つながらなかったの。

○質問者 そうすると、恐らくは席を外してそのあたりのことは言っているだろうという。

○細野大臣 伝えてたと思いますけどね。逆にどうなんですかね。

○質問者 恐らく伝わっているからああいいう3班体制によって、その後の3班体制の情報は入ってきていたんですよ。

○細野大臣 入っていました。

○質問者 では、恐らく伝えてくれているんだとは思いますが。

○細野大臣 そのときに、初めはペントもやるということになっていたから、では東電は自分で判断してそれでオーケーだったんですけれども、途中でもしかしたらこれは躊躇しているのではないかというので、ある時間帯から指示に切りかえたはずで、そこも含めて決死隊を作ってもやれというのは、これはもう政府の意思だと。絶対に外せない政府

【取扱い厳重注意】

の意思だというのは伝えようとはしていましたから、常識的に考えると伝えていたんでし
ょうね。

○質問者 そのときは、海江田大臣なんかも [REDACTED] おられていたと。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 班目さんなんかもおられたんですか。

○細野大臣 いましたね。

○質問者 そこでそういったやり取りがあって、ベントがその後途中までやって、なかな
か途中からその先に進まないというところで、結局これは 14 時から 14 時半くらいまで時
間がかかっていますよね。その間もずっとベントの情報なんかは逐次入っていましたか。

○細野大臣 そうですね。その手動のものが開いたのは、それでも割と早かったのではな
かったですか。

○質問者 一番最初のは、9 時 15 分くらいに恐らくやっていると思われるのですけれ
ども、その後の次の AO 弁の方が。

○細野大臣 こちらが開かなかったんですよ。そうです。ただ、最終ベントの確認は確
かに午後なのですけれども、もうちょっと早い時間に圧力が抜けたというのでベントがで
きたというようなことが入ったんですよ。

○質問者 中操から残圧を期待して入れてみたら、ちょっと線量が上がったと。

○細野大臣 結局外からやっていたよ。どうやってやったかは、そこはちょっと私
も技術的なことなのでよく分からないのですけれども、外からやってみると。電動のもの
も持って行ったら、それが機能しなくて開かなかった、外からやってみると言うので、外
からなんてできるのかな、外から開くなら、初めから外からやるだろうと思った記憶があ
るのですけれども、そうしたら下がったと。これは開いたというような話を聞いたのは午
前中ですね。

○質問者 10 時 10 分か 20 分かですね。

() ○細野大臣 それくらいの時間だったと思います。

○質問者 それで、それを聞いた後、やはりちょっと。

○細野大臣 開いたのが閉まったとかという話になって、ベント弁というのはずっと開け
ておけないのか、途中で閉まったりするのがみたいな議論をしたんですよ。

○質問者 その頃は、 [REDACTED] そういう話をされていると。

○細野大臣 そうです。

○質問者 それからずっといて、ようやくそのベントで 14 時半くらいまでに圧力が下がっ
てきて、どうもベントができたらしいという情報なんかも入ってきたのですか。

○細野大臣 それも入りましたけれども、だから、一回できたと言ったのに、また閉まっ
たとか言って、開いたとかと言って、本当のところはどうなんだろうなどは思っていたん
ですよ。

○質問者 その頃の 1 号機に対する注水は、ずっと継続してやられているんだというふう

【取扱い厳重注意】

に認識されていましてか。

○細野大臣 真水が入っていましたよね、途中から。真水が入っているのだけれども、切れるだろうみたいな話があったんですよ。そうしたら、では海水だなという話に当時はなっていたんです。だから海江田大臣はそれを入れる準備もしていたのだけれども水素爆発で入らなくなったんです。それは認識していました。

○質問者 そうすると、東電がと言うよりも、具体的には吉田所長以下が現場において海水注入をするための準備をしているということは御存じだったわけですね。

○細野大臣 知っていました。

○質問者 もう爆発前の段階で。

○細野大臣 はい。知っていました。ただ、武黒さんからの報告で、準備していたのが水素爆発で全部だめになって入らなくなったという話を聞いたんです。その辺の、海水を入れるか、水素がどうかという話までは、余り総理に報告しなかったんですよ。総理が、では7時、6時に海水を入れるというときに、海水の話をも分余り聞いていなかったんだと思うのですけれども、それで、再臨界という話になったんですね。

○質問者 ではその前の、海水注入の準備を爆発前にやられたときは、その前段階で、そういう海水を入れる準備を今からしようと思うけれどもとか、海水を入れようと思うけれどもというような、そんなやり取りは昔総理との間ではなかったと。

○細野大臣 余りそのときはしていなかったですね。あのときは、また与野党の党首会談とかがあったりだとか、いろいろしていたんですよね。総理は総理で、ずっと総理もそれだと神経が参るじゃないですか。そこはやはり我々の仕事だという意識があったんですよね。本当に重要なときは総理の判断を仰ごう、それ以外のところはここでやればいいと思っていましたから、ちよつとその間は減らしていたんですよ。大きな事象がないときは、原災本部もあったので。

○質問者 それで、XXXXXXXXXX 1号機が爆発したことが、これは最初メモで入ったんですか。

○細野大臣 私の秘書官がメモを持ってきたんですよ。こんなことを言っているけれどもどうなんですかと言ったら、情報が入っていませんと。それで愕然としたんですよね。

○質問者 武黒さんたちは、その場におられましたか。

○細野大臣 いました。

○質問者 武黒さんたちは知らないと。

○細野大臣 知らなかった。煙が上がっているらしいというのが初めて、爆発音が聞こえたと次にメモが入って、煙が上がっているとちよつとそういう火事があるかもしれませんみたいな話から始まって、爆発が分からなくて。水素爆発はしないと言っていたから。

○質問者 班目さんもそこにおられたんですか。

○細野大臣 いたと思いますね。いや、ちよつとその時間帯は余り定かではないですけれども。班目さんは、水素爆発はしないと言っていたから。

【取扱い厳重注意】

総理と一緒にサイトに行っていますよね。帰ってきた後、班目さんは下に帰ってきたのかな。[REDACTED] すみませんが定かではありません。

○質問者 その後、爆発、何か異変が生じたということが分かって、5階の方に行かれた。

○細野大臣 戻ったんです。そうです。

○質問者 そのときは、武黒さんたちはどうされていたんですか。

○細野大臣 一緒に上がりました。全員上がりました。

○質問者 一緒に上がってどちらの方に行かれたんですか。

○細野大臣 総理執務室ですね。

○質問者 そこには、菅総理もおられたと。

○細野大臣 はい。いました。

○質問者 そこに集まって、そこでどういう話をされたんですか。その情報がなかなか入ってこないというような。

○細野大臣 この爆発は何かということが分からなかったんですよ。爆発が何かということよりは、爆発が何かと一瞬論争になったんですよ。今から思うものすごく奇異なのですけれども、テロかもしれないみたいな話まで出たんですよ。でもそんなことはもうどうでもよくて、周辺の放射線量が上がっているか上がっていないかの方が大事だったので、そちらを調べると。原因は後から究明しようと言って、本当にそれは緊迫して、基本的に爆発の前と後で変わっていないと聞いてものすごくほっとしたんです。

○質問者 これは、どうやって。

○細野大臣 現場に電話で聞いたんです。

○質問者 現場というのは、どこに。

○細野大臣 サイトです。

○質問者 サイトですか。

○細野大臣 当時、もう電話がつながっていたんだと思うんです。私が電話したのか、東電の本店に電話したのか、いずれにしても、とにかくあらゆる手段でサイトの中の放射線量を、幾つかまだモニタリングポストが生きていましたから、それを調べると言ったら数値もだしか言っていました。前がこうで、後がこれで変わっていないと。大丈夫だと言うので、ではそれで記者会見に行ってくれと言って、それで行ってもらった覚えがあります。

○質問者 建屋に溜まった水素が爆発したのではないかというような話が出てきたというのは、いつ頃になるんですか。原因に近い話になりますけれども。

少なくとも、先ほどの海水を入れる入れないというような話をする 18 時頃の段階では、そういう可能性が高いのではないかというような議論にはなっていたのですか。

○細野大臣 出ていたかもしれませんが、でも、原因の究明というのは全く意味がないんですよ、そういうときって。そういう話はしないでおこうと言ったのです。原因究明をすると必ず誰かが悪いという話になるんですよ。何で分からなかったんだとか。それをやり出すと本当に話が進まないで、何回かそういうことがあったのですけれども、そのと

【取扱い嚴重注意】

きもうやめようと。誰が悪いとか責任がどうか、原因が何かとかというのは後からやればいいのだからかやめようと言って、全部やめてもらったんです。

○質問者 では、その流れとしては。

○細野大臣 多分、最終的にこれは水素爆発だろうと確認したのは、もう海水を入れる入れないのその頃ちょっと1拍置く時間帯があったので、その頃だと思います。

私なんかは、海水がどちらにしても入らないと思っていたから、入れたくてしようがなかったけど、その間は手の施しようがないと思っていたので、ちょっとそのとき手が空いていたのがいたのでどうなんだと聞いたら、いろいろ考えると可能性としてはデロというのはさすがにないだろうし、水素爆発だろうと言って、班目さんも水素爆発だろうと言い出していたので、多分間違いないと思いますという報告はしました。

○質問者 この頃、その爆発の後18時頃から海水を入れる入れないというような話になるその間のところとして、17時39分頃に福島第二原発から半径10キロ圏内と、これまた1Fの後追いのような形になっていますけれども、これはどういう経緯だったのですか。

○細野大臣 これも確かに決めたのは記憶にあるのですがけれども、第二だったので、第一の事象が1日遅れてきているくらいの印象なんですよね。

だから、保安院から報告があって、ではすぐ10キロにと。3キロと10キロだったので、それと類似のケースだということで10キロにしたんです。余り議論しなかったんです。

○質問者 そのときの流れとして、5階に上がられてからは、 もう一度戻るといふわけではなく。

○細野大臣 いや、戻っていません。ずっと5階にいました。もうその後は、 は本当に情報を取らなければならないとき以外はほとんど行っていませんので。

○質問者 では、この福島第二原発の話がされているときというのは、これは総理の執務室の中に皆さんおられているときにそういう話をしたのですか。

○細野大臣 この頃は、もう総理の執務室の隣の応接室が、大体もう常時そこで打ち合わせをする形になっていたの、そこですね。

もちろん総理指示なので、最後は総理の判断を仰いでいるとは思いますがけれども、ほとんど議論は第二についてはなかったです。

○質問者 これは保安院の方からそういう申し入れみたいなものがあったのですか。

○細野大臣 そうですね。そこはもう保安院の仕事ですから。

○質問者 その後に、18時25分のところに、今度は第一原発から半径20キロ圏内だということで拡大されているみたいなのですがけれども、これは、ちょうど海水注入の論議をされているさなかにこういう話になったんですかね。

○細野大臣 そうですね。これは、再臨界の可能性があると班目さんが言ったので、再臨界とかまた爆発とかということになった場合に10キロでいいのかというのは、これは私が問題提起をしたんですよ。

そうしたら、10キロよりもうちょっと広い方がいいという話になって20キロになったん

【取扱い厳重注意】

です。

○質問者 これは、例えば15とか30ではなく20なのかというのは、何か指標みたいなものがあつたのですか。

○細野大臣 いや、もう私たちは分からないから最大で何キロだと。最大で危険が及ぶのは何キロだと問いかけて、20キロだという話になったんです。

○質問者 それを聞く相手というのは班目さんとかになるんですか。

○細野大臣 基本的にはそうですね。保安院と班目委員長ですよ。この2者しかいないんですから。

最大だよ、最大で何キロだという話になって、10キロよりは20キロという話になったんです。

○質問者 この拡大というのは、再臨界の可能性がゼロではないという、ニュアンス的にはもう少し強いように受け止められるような言い方であるように認識をされたわけですよね、その当時としては。その班目さんがおっしゃっていることについてですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 そうすると、そういう可能性があるのであれば現状のままではよろしくないのではないかというふうに思われて、そこから最大で言うところのどのくらいなのかとやられたら、班目さんは20というようなことになった。

○細野大臣 20という数字を誰が出したかというところまではちょっと記憶していないのですけれども、20で大丈夫だなという話になって、それ以上は大丈夫ですという話で20キロ。常に、最大で何キロだという議論は必ずしていたんですよ。

○質問者 このときは、その場所には菅総理はおられないんですか。

○細野大臣 いました。

○質問者 そこにはおられたと。

○細野大臣 だから、ブレイクするときですよ。6時から再臨界論争があつて、大分技術的な話になって、燃料が固まっていたらどうか、再臨界というのはちょうど水と燃料のバランスが、あんばいがよくないとならないじゃないですか、そういうふうになるのかならないのかとか、ホウ酸を入れているのかとか、そういう議論もしたんですよ。

それで、これはまずいなと思ってブレイクして、私が、ちなみに避難はどうなんだという話もしたんです。だから、そのときは全員いたんです。それで20キロになったんです。

○質問者 そのときは、そういう議論をしているところですから、東電の武黒さんなんかもおられて。

○細野大臣 いたかもしれません。勿論、口は出していませんけれども、そこは、あなたはちょっと出ていてくださいと言うわけにもいかなかったのです。

○質問者 その後、1号機に海水注入の了解ということで、ブレイク後はそれほど何か議論することもなくすんなり決まったということですか。

○細野大臣 そこはないということになったので、では入れようということでゴーを出した

【取扱い嚴重注意】

んです。

○質問者 再臨界の可能性がないということになって、それは班目さんか誰かがそういうふうにはっきりおっしゃったという。

○細野大臣 そこが、ちょっと私も怪しいのですけれども、久木田さんというのが、原子力安全委員長代理でいるんですよ。それで、班目さんはその辺で体力の限界が来ていて、いなくなったのではないかと思うのですよ。そのときに初めて出てきて、これも止めてもらった方がいいですね。

<録音停止 00:17:58>

○質問者 そうしたら、その後の総論的な形になると思うのですけれども、基本的には細野大臣と寺田補佐官、18日の頃なのですから、このお二方が政務でおられて東電側とか保安院の人間なんかもいて。

○細野大臣 いました。勿論、福山副長官も枝野長官も海江田大臣も誰も帰っていないですよ、家には。ただ、もうお分かりになると思うのですけれども、一晩徹夜で緊張していて、二晩目、12日に徹夜して、もうそうすると普通の年齢の人は体力も限界なので、海江田さんなんかもう本当にグロッキー状態だから、とにかく1時間寝てくれという感じであれしてもらって、でも誰か起きていないといけない雰囲気だったから起きていたんですよ。

○質問者 その間も小康状態というか、爆発ほどではないにしても、例えば18日に3号機のHPCIが止まるというようなことになって、また水を入れなければならないと未明からなっていますよね。

○細野大臣 そうです。それはよく覚えています。

○質問者 そうすると、また緊張感が。

○細野大臣 そう。いよいよ3号機が危ないというのは分かってきたわけですよ。さすがに1号機のベントのタイムスケジュールと似ているじゃないですか。なんとか防ぎたかったのですけれども、防げなかったの、それがショックでしたね。

○質問者 その頃というのは、5階の応接室にみんな集まって、東電を中心にして情報を入手して、それに基づいて今後どうするべきかというような話をされている。

○細野大臣 そうです。

○質問者 先ほどのお話の中で、吉田所長と直接電話で相談されたこともあると。これは、電話番号とかはそういうふうにして。

○細野大臣 それがですね、私もそこがどうだったんだろうなと時々思うのですけれども、携帯に入れていたので誰かから教えてもらったんですよ。総理と吉田所長も何度かしゃべっているのですけれども、私にかけて総理につないでいるんですね。2回くらいやっていると思います。私も、そんなにかけていないんですよ。多分14日くらいまでで3回くらいしかかけていない。本当にシビアなときだけかけていたので。

○質問者 向こうから、吉田所長の方からかかってくるということのはあったんですか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 1回だけ、14日の夕方、2号機の水が入らなかったとき、あのときは多分現場が一番緊迫したんだと思うんですよ。だめかもしれないとかかかってきて、燃料切れだったんですけども、あのときが多分一番危なかったときですね。あのときだけです。

○質問者 吉田所長からかかってきたのは一度だけですか。

○細野大臣 吉田所長からかかってきたのは一度だけです。

それで、これはだめかもしれないと言って。総理の執務室でたまたま菅総理と私2人だったんですよ。何かで私が報告をしていて、そうしたら吉田所長から電話があつて出たらその話だったので、総理も14日は憔悴していたので、しばらく沈黙があつたりして。そうしたら5分か10分くらいしてかかってきて燃料切れだったと。お恥ずかしいですけども、燃料入れて入りましたというので。

○質問者 消防車の燃料が切れていたというときですね。

○細野大臣 そうです。

○質問者 では、その頃、13日からずっと話をされるとときというのは、具体的なオペレーションとして、例えば3号機に恐らく水が当時まだ海から直接取っているという状況ではなかったの、水をどちらに入れるか、3号機に入れるのか2号機に入れるのかとか、そういう具体的なオペレーションについての議論なんかをされているんですか。

○細野大臣 多少しましたね。今思い出しましたがけれども、プールみたいに作って、こちらから行ってピットでこちらへ回してとかいうことをやっていたでしょう。説明は受けました。ただ、そこまでいくと我々も手の施しようがないから、何かやれることがあつたら言ってくれと。更にそういう放水車が必要だとか、こういう機材が必要とか、自衛隊が必要とかということを書いて、ちょっと無力感があつたんですよ。13日は。当時いっぱい放水車とか消防車とか入っていると思うのですけれども、ジャックが合わないとか何かそういう話もいっぱいあつたりしてですね。ですから、13日はいたのですけれども余り大したことはできなかったんですよ。

○質問者 少し細かい話になってきますけれども、3月13日は3号機に水を結局9時25分頃から入れ始めているみたいなのですけれども、最初は淡水を入れて、その後で海水に変えているという流れになっていまして、この直接の経緯を書いているのですけれども、どうも■■■■部長が当時、5時とか6時とかその頃なのですけれども、その頃に吉田所長と電話で話をされているみたいで、そのときに、実は、吉田所長はもともとは海水をいきなり入れようとしていたようで、そのラインを作って水を入れようとしているのですが、ただそれを作っている途中でちょうど■■■■さんから電話連絡が入ってきまして、いろいろ防火水槽だとかというのは中越沖地震以降にいっぱい作っているのだから、そういうところから水を取れるんだしたら、そちらからやった方がいいんじゃないかというような示唆をもらって、吉田所長からすると、それは官邸にいる■■■■さんからのお話なので、官邸がそういう意向なのだろうと当然受け止めますので、それでチェンジをしてこの9時25分から淡水注入開始という経緯になっているみたいなのですけれども、そういう海水なのか淡水

【取扱い厳重注意】

なにかみみたいな議論をその頃やられていたかどうかというのは。

○細野大臣 少なくとも、もう1号機がそうなっていましたから、淡水、海水の違いというよりは水という認識しかなかったですけれどもね。

ただ、このときかどうかは分かりませんが、海水も結構意外と海から遠いので、なかなかホースがないので、ピットでつなぐというような話はよくしていましたね。水溜めを作っていましたよね。図を書いて、こちらからこうしたらどうこうという説明はしていましたね。

○質問者 海水を入れるというのが、1号機が海水を入れましたとか、3号機は海水を入れましたというときの、このときの海水を入れているというのは直接海から取っているのではなくて、逆洗弁ピットという、本来は水を入れるところではないらしいのですけれども、そこにたまたま津波で水が溜まっていたのがあって。

○細野大臣 そんなことも聞きましたね。

○質問者 そこから取っているというようなことは、後から分かったというわけではなく、もうすぐに、海水注入開始という頃からお分かりでしたか。

○細野大臣 結構報告を受けていたのですけれども、正直に言うとそれは分からないし、現場の地図が明確に頭に入っているわけでもないし、それがどうだという判断も意味もないので、何とか入ってくれというくらいでしたよね。むしろ、私の関心は、その18日は、水素爆発を防ぎたかったから別のチームを作ったりして、チームというか東電に対して何とか防げないのか、方法はないのかと言って、別のチームで検討をしてくれとかという話の方をしていて、海水の話は聞いていたのですけれども、深刻だというのは分かっていたんですが、深刻だからと言って別にやれることはないじゃないですか。だから、私の頭の中にあっただのは、何がやれるか、何が重要かということを判断して、そちらをちゃんと検討してもらおうということがあったので、余り詳しく覚えていません。

○質問者 その水素爆発対策というと、先ほどの建屋にどうやって穴を開けるかとか、水素が溜まらないようにするにはどうすればいいかとか、その辺の検討をしていたということですか。

○細野大臣 していましたね。

○質問者 そこには、東電の人間以外に、例えばプラントメーカーの方とかそういうような方とかは。

○細野大臣 来ていました。東芝の■■■さん。彼が来たのはもうちょっと前ですよ。12とか13。彼は非常に頼りになった。必死で東芝で考えてくれていました。途中で日立も来たんじゃないですかね。人を常駐させていたかどうかは分かりませんが、日立の社長も一回来ましたね。日立も東芝も考えていて、やっていましたね。

○質問者 それは、どなたが呼ばれたのかというのはわかりますか。

○細野大臣 これは総理が呼んだんですね。メーカーの方が詳しいだろうと言って、メーカーを呼べという話になって。その辺の勘はあの人には鋭いんですね。■■■さんがずっと

【取扱い厳重注意】

いました。

○質問者 ■■さんはその後も応接室で議論に加わっていたのですか。

○細野大臣 加わっていました。積極的に加わっていました。むしろ東電の技術者より詳しいなという印象を受けました。何か方法も考えたんですよ、幾つか。

ヒアリングされましたか。

○質問者 ■■さんはしていませんね。

○細野大臣 ■■さんはした方がいいかもしれません。ずっと初めから知っていますから。

○質問者 では、■■さんも途中で、12日、13日の早い時期から来られていたということですね。

○細野大臣 そうだったと思いますね。12日か13日は覚えていませんけれども、官邸にいましたから。

○質問者 武黒さんなんかもずっとそこにおられたということですか。

○細野大臣 ずっといました。武黒さんは帰っていなかったと思います。ずっといましたね。

○質問者 保安院なのですから、保安院のメンバーはいろいろ変わっていった。

○細野大臣 結局ですね、ここもちょっと止めてもらった方がいいですね。

<録音停止 00:28:43>

保安院のユニホームを着てやっていました。総理も、安井さん、こいつがいいと。

○質問者 それが13日頃からずっとその後は。

○細野大臣 安井さんはずっとその後やっていました。

○質問者 東電に行ってから。

○細野大臣 東電に行ってから安井さんでした。

○質問者 今度14日になりますけれども、14日になりますと、3号機が水素爆発を11時01分にしていますが、これは実際、その前の段階からそういう懸念を持っておられたということですね。

○細野大臣 強く持っていました。

○質問者 ただ、有効な、即効性のあるような対策がなかなかできなかったということですね。

○細野大臣 結局、その唯一の方法の穴を開けられなかったし、水素が抜けなかったのもう情けない話なのですけれども、水を入れてできるだけ水素が出ないようにするしかないということでやっていたんです。ただ、入らなくなっていたから。

○質問者 この爆発を知ったのはどの段階ですか。

○細野大臣 これはもう瞬時に分かりました。映像も出ましたよね、たしか。

○質問者 リアルタイムですね。

○細野大臣 ええ。映像は私、見ていないのですけれども、これはもうすぐ東電も認識していました。予想していたから。

【取扱い厳重注意】

○質問者 現場の現地の方に状況の確認とか、そういうのを直接電話を誰かがやってとかいうのはされたかどうかというのは。

○細野大臣 それはちょっと覚えていないですけども、でももう3号機の水素爆発は予想もできたし、起こったということもはっきりとした共通認識だったから、余り確認する意味はなかったかもしれないですね。

ただ、3号機の水素爆発のあたりから周辺の放射線量が上がってきたので、たしかそうですね、だから、もう本当にこれはまずいと思いました。私がずっと見ていて、これはちょっと本当に制御できないかもしれない、制御不能だと思ったのはこの日ですね。本当にまずいと思いました。この日は。

○質問者 この3号機が爆発して、周辺の線量も上がって、2号機のRCICも明らかに止まった兆候が、水位がどんどん下がっていくということになっていって、今度は2号機もかというような頭になっていきますよね。

○細野大臣 はい。なりました。

○質問者 2号機ですと、当然吉田所長以下も早く水を入れなければならないというふうにお考えになっていたようなのですけれども、当時水を入れるにはサブプレッションチェンバーの圧力や温度が非常に高くなっている、ここにSR弁で蒸気を逃がしていくと上手く凝縮もしないだろうし、そのうち破壊されてしまうと。

○細野大臣 破断するかもしれないと。

○質問者 はい。ということで、ベントラインを何とか早く作らなければならないということ、優先順位としては、まずベントラインを作った上で注水をしようという作戦で人を動かそうとして、当然その注水のラインは作っているのですけれども、減圧まではやらないでベントを何とかしようというような、そんな話があったところ、どうも班目先生と電話で吉田所長が直接やり取りをされているみたいなんです。

○細野大臣 そうなんですか。

○質問者 はい。そこで、官邸側の方の考え方ということで吉田所長は受け止めているのですが、要するに、確かに懸念は分かるけれども、全く凝縮しないわけではないから、それよりも早く、格納容器よりも、そんなことを言っている場合ではなくて、圧力容器の方がむしろもう問題だということで、早く減圧して水を入れるという示唆をいただいているみたいで、それを東電の中では班目方式というふうに名付けて、班目方式で行くのか行かないのかというのをその後議論されているみたいなんです。その基となるような、早く水を入れるべきではないとか、いやいやベントが先だとか、何かそんな話があったかどうか。この14日の2時とか3時頃の昼下がりに、どんどん状況が、2号も1号、3号に近付いていっているという情勢のときにですね。そういう御記憶はございますか。

○細野大臣 いや、ちょっとごめんなさい。分からないですね。ただ、班目さんは、メーカーにも一時期おられた方だけでも、テクニカルな部分でそんなに詳しいわけではないとは思っていたんですね、その頃は。初めは、いわゆる原子力の、例えばあの人は流体

【取扱い厳重注意】

が専門ですけれども、そういう論理と言うかそちらの人とエンジニアの技術者がどう違うのか分からなかったんですけど、話していると大体分かるじゃないですか。現場に詳しくて具体的なオペレーションに強い人と理屈の人と。班目さんがこちらの学者だというのはすぐ分かったので、そのことについて班目さんに現場に対して意見させようみたいなことは考えなかったですけどね。

○質問者 14日の、例えば先ほどのお話ですと、夜のまだ早い頃、夕方から夜にかけての頃に、恐らく吉田所長から細野大臣のところに電話をされていると思うのですが、それ以外に、この頃、まだ明るいうちに吉田所長と直接細野大臣がお話になられたことというのはなかったですか。かなりピンチの状況になっているのですけれども。

○細野大臣 そうですね。かけているかもしれません。

私が吉田さんから電話をもらってショックだったのは、それまで何度もピンチがあったんですよね。ピンチのときに状況はどうだというので私がかけている。普通るときはかけないですから。これまで、「いや大丈夫です」と、常に「まだやれる」という返事だった人が、このとき弱気になっていたから、これは本当にだめかもしれないと思ったんですよ。

だから、もしかしたら3号機の爆発の前後とかでかけているかもしれません。ただ、その記憶はないんですよ。そのとき以外は常に、大丈夫だと言った人ですから。

○質問者 ここにちょっと書いてあるのですけれども、計器が正しいかどうかという前提はさて置き、少なくともずっと水位が下がっていて水が全然入らないので、夕方18時過ぎ、18時22分頃にはもう、TAE マイナス3,700 ということで燃料が全部出ているという状況になって、その後ダウンスケールしていつているという状況で、彼らも、水を全然入れていなくて何時間も経っているのです、これは完全に燃料が露出したというふうに考えた方がいいと。それだけ露出する間には当然損傷も相当進んでいるだろうというところで、かなりもうまずいというふうなことをどうも吉田所長も考えるようになって、その頃に、次からまたお話が流れになっていくのですけれども、いわゆる彼らが言うところの退避、退避というのは、普通は、所内で、例えばヤードの方で作業をじていて線量が上がってきたので免震重要棟に退避するというようなことをされるみたいなのですが、吉田所長はそのとき、当時、協力企業であるとか若い事務の方だとか、そういう人たちもいっぱい免震重要棟におられたので、この方々を2Fの方に退避させた方がいいのではないか、あるいは、2Fと言わず、どこか構外に退避させた方がいいのではないかというようなことも頭をよぎり始めて、それを本店の方と話をされているみたいなんです。

○細野大臣 何時頃ですか。

○質問者 それは、この18時22分の後の19時とかその頃です。

○細野大臣 私としゃべった後ですね。

○質問者 恐らく、燃料切れだということの話だとすれば、その後でやはり燃料切れでしたというのは19時54、7分の20時ちょっと前の話だと思うのです。

○細野大臣 それより前ですか。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それよりも前の頃からそういう話がちよろっと出始めていて、ただ吉田所長は、それはまだ確実にそれをするというよりも、このまま状況が悪化していけばそれを考えなければいけないから、そういう状況になったときのオペレーションもきちんと考えた方がいいということをお店の方に、そんなことを考える余裕はうちにはないから本店の方で考えてくれというようなことのやり取りがどうもなされているみたいで、そのあたりのごことは吉田所長とは直接は。

○細野大臣 私がしゃべったのは、2回電話していますけれども、両方30秒以内ですから。

○質問者 弱気になったときも、実はみたいなの、そういうものもないですか。

○細野大臣 なかったです。もうちょっと頑張ってみると。とにかくやってみると言ってお電話を切って、5分か10分経って大丈夫だとかかかってきたから、大丈夫ですかと言ったんですよね。そうしたら大丈夫ですと言ったんですよ。

○質問者 大丈夫ですというのは、弱気の電話のときですか、それともその後の燃料切れの。

○細野大臣 最後のときにです。

○質問者 実際に吉田所長は、直接おっしゃっておられるのは、自分はもうここから出ていくことはないかと思っていると。当時からずっと思っていたと。ただ、若い事務の人間だとか、周りの全員が残っておく必要はないというか、実際には何百人といて、600人くらい人間がみんな廊下やいろんなところで、次に自分たちが何かあるかもしれないからというので控えている人たちがいて、この人たちをどうにかしないと、という思いがだんだん強くなってきているみたいです。要するに、水が入ったといっても、その後また入らないというのをずっと繰り返していってましたので、その思いがどんどん強くなっていくと。

そこで、当然本店側の方もその状況についてはだんだん分かってきますので、少なくとも保安院の方には、具体的には寺坂院長なのですが、清水社長は。

○細野大臣 それは何時頃ですか。

○質問者 これはもう早いんですね。先ほど言った19時台の段階で、まだ本決まりではないのですけれども、そういうようなことも考えていますと。

ただここで、これはあくまで東電側の言い分です。東電側の言い分としては、いわゆる巷で言われているような全員撤退するというようなことは考えていませんと言っています。どこでどう間違っただけなのか分かりませんが、そんなことは考えていませんと。少なくとも吉田所長はかなり強くおっしゃられるんです。現実には自分はそのようなことは全く考えていないと。その後、2号機、4号機が爆発したときもそんなことをしていないじゃないかということをお強く言われるところがありまして、では本店の方もどうかと言うと、本店の方もそのようなお話をされるんです。異口同音に。

○細野大臣 そこは、完全にあれがあったんでしょうね。初め、多分保安院に入ったというのは、私も何となく分かりました。松永次官か誰かが、多分海江田さんに連絡してきているんじゃないですか。恐らくですよ。海江田さんにも直接電話があったはずですよ。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それは清水社長からですか。

○細野大臣 清水社長からです。

私にも電話があったのですけれども、私は、海江田さんが撤退すると言っているけれども絶対に撤退させてはいかぬだろうと言ってたから、私は取らなかつたんです。

○質問者 それは、清水社長から直接ですか。

○細野大臣 ええ。清水社長からですと言って、海江田さんに電話があった後私に電話があったんですよ。同じところにいるので、俺は出ないと言って出なかつたんです。多分それは、総理につないでくれということだったと思うのですけれどもね。海江田さんは完全に撤退すると解釈していましたね。

枝野さんにも連絡があったのでしたか。官房長官にも電話があったんですよ。官房長官もそういうふうにとっていました。

○質問者 それは、海江田さんとは一緒におられるところで、海江田さんに電話がかかってきていたと。

○細野大臣 いや、電話に出るときというのは、みんなの前でしゃべりませんからちょっと席を外すじゃないですか。帰ってきて、そういう話を海江田さんがしていましたね。

○質問者 それは、場所は応接室ですか。

○細野大臣 はい。そうです。応接室の外に出て電話をしたかなんかだと思います。

○質問者 そのとき枝野さんはどちらにおられたんですか。

○細野大臣 ちょっとそれは。でも、官房長官室というのが5階の同じフロアなんです。隣の部屋なんです。枝野長官も、隣の部屋の官房長官室に入っていたか、もしくはこちらの応接室にいたか、どちらかにしかいませんから。

○質問者 そのときのイメージ、海江田大臣からお聞きになったときの印象としては、吉田所長以下全員がもう手を引くというような印象がございましたか。

○細野大臣 そうでしたね。私は直接話していないので、海江田さんと枝野さんから聞いた情報はそういう話だったんです。

○質問者 少なくとも海江田さんと枝野さんはそういう認識でしゃべっておられたと。

○細野大臣 お話になっていたと思います。

○質問者 東電としても、一部残して撤退するならわざわざそんなことを言うてくる必要はないのではないですか。

○質問者 そうしたら、全員が撤退をするというお話になられて、その頃、武黒さんとか
■さんはどちらにおられたんですか。

○細野大臣 いました、そこに。

○質問者 その場におられましたか。

○細野大臣 いました。それで、これはもう15日になってからなのですからけれども、これは何時頃なのか、最後に総理のところまで話し合っているのが3時とか3時20分とかその辺なのですからけれども、その前に、撤退するかどうかという話を総理を除いてしているんですよ。

【取扱い厳重注意】

ね。そのときに武黒さんも■■■さんも、もうだめだと、そういう話をしていたんですよね。

○質問者 だめだというのは。

○細野大臣 撤退するしかない。手はない。

○質問者 武黒さんたちは、そのときは個人的なことというよりも、要するに個人的なそれを枝野官房長官たちから初めて聞いた感じだったのか、あるいは東電の命を受けてというか東電から。

○細野大臣 それは分かりません。分からないですけれども、今でも覚えているのは、武黒さんがしょんぼりしてしまって、もう何もできませんみたいな話をしたから、私は、ちょっと申し訳なかったけれどもみんなの前で「あんた、責任者だろ。しょんぼりしていないで何か考えろ」と言った覚えがあります。あのとき班目さんが、もう手はありませんから撤退やむなしと言ったんです。一番の専門家だと思っていたから、彼がそういうことを言ったことには本当に愕然として。

○質問者 班目さんがそういうふうにおっしゃられたんですか。

○細野大臣 言いましたね。総理がその後、撤退はあり得ないと。「撤退はあり得ない。そうだろう」と言ったら、撤退はありませんと言ったので、また翻したなこの人と思ったんですよ。

○質問者 そのときは、まだ清水社長はおられないところで。

○細野大臣 いません。

それで、撤退をするかしないかで、するならどういふことを考えなければいけないのかというのを考えよう。それと並行して、撤退をしない、何とかなる方法を技術陣、専門家は考えてくれ。撤退するならどうかというのは、我々政治家が考えるしかないじゃないですか。ちょっと一瞬議論はしたんです。でも、やはりもう判断をした方がいいというので総理の部屋に入って、撤退するかどうかという御前会議みたいなものをしたんです。そうしたら瞬時に、撤退なんてあり得ないだろうという話になったんです。

だから、武黒さん、■■■さんはそのときどう思っていたかですよね。本店と現場がちょっと意思が上手くいっていなかった可能性もあるし、本店と武黒さんが連絡が上手くできていなかった可能性もあると思います。

ただ、少なくともあのとき武黒さん、■■■さんは、もう撤退やむなしと思っていたと思います。

○質問者 それは、完全にもう全員が引き揚げるという。

○細野大臣 手はないということですからね。全員かどうかは分かりませんよ。ただ、少なくとももう手はない。

○質問者 今の現状のまま、そこで全員が残ってみんなが対処するというような。

○細野大臣 ええ。

○質問者 ただ、少なくとも枝野官房長官だとか海江田大臣においては、東電が全員持ち場を離れるという前提でお話をずっとされていたということですか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 そうですね。全員というのは、人っ子一人残らずということかどうかというところまでは話をしていませんよ。ただ、要するにこれ以上何もすることはできない、できないので、みんなは言わないけれども、我々の共通した意識は、少なくともそういうふうに感じた我々の意識は、このまま行ったらあそこにいる人の命が危ないかもしれない。残れと言うのは、場合によっては死ねということにもなるかもしれないと思ったので、みんな躊躇したんですよ。

○質問者 では、吉田所長が頭に描いていたというふうに今おっしゃられていることというのは、実際に3月15日の明け方以降に行われた姿で、要するにあのときに行ったことというのは、50人くらい残して。

○細野大臣 50人くらい残してあとは引いたという。

○質問者 それで、とにかく当直は全員残れという形で、持ち場を離れると1号から2号、3号と全部だめになって、4、5も全部だめになるので、そんなことをすれば東日本全部なくなると吉田所長もずっと思っていたとおっしゃるんです。

○細野大臣 吉田さんがそう言っているのは、私も信じます。そういう人ですから。信じますけれども、そうはとっていなかったですね。

武黒さんと■■■さんがどう思っていたかというのは、ちょっと確認する必要があるかもしれないですね。

○質問者 少なくとも、武黒さんと■■■さんは少しあきらめムードのような、そういう雰囲気だった。

○細野大臣 あきらめムードではなくて、完全に肩を落としてうなだれていたんですから。そのときの姿は鮮明に覚えています。だから私が武黒さんを面罵したというか、今から思えば失礼だったかもしれないですけれども、何か考えろと。我々ががっかりするわけにはいかないじゃないですか。

○質問者 武黒さんたちは、それでどうされたんですか。その後も何か意見を言うこともなくずっと。

○細野大臣 そうですね。だから、その後もう余り間髪入れずに総理に判断をしてもらって、清水社長を呼べと。「俺は東電に行く」という話で、すぐに呼んで、清水社長は割とすぐに来ましたから、そこで、東電に乗りこむと言って、いいなと言ったら、わかりましたと言って、そのままもう東電に戻りましたからね。2人も帰ったし、私は先遣隊で行かされて、4時頃ですか、行って、今から総理が来るからちょっと準備してくれと言ったんです。

○質問者 その清水社長が来られたとき、そういう撤退をするのかしないのかということについて菅総理の方から確認はされているかどうかというのは。

○細野大臣 何かそんなやり取りはしていませんね。ですから、撤退は考えていませんみたいなことを言っていましたね。目の前で総理が目をひんむいて言っていましたからね。

「いや、撤退します」とはとても言える雰囲気ではなかったから、撤退しないことにした

【取扱い厳重注意】

んだなと思いましたがけれども。

○質問者 その頃、武黒さんたちは、結局清水社長が来られる前に菅総理と会われているのですか。

○細野大臣 みんなで入っていますから。でも、撤退のときはいなかったかもしれない。最後入るときは政府関係者だけにしたのかもしれない。ちょっと覚えていないんですよ。

○質問者 清水社長が来られたときにおられたかどうかというのは。

○細野大臣 そのときはいたと思いますね。

○質問者 武黒さんたちもですか。

○細野大臣 ええ。

このときは入っていないかもしれません。東電は入っていないかもしれません、撤退の判断のときは、政務でやっていたときは。

○質問者 その前の段階で武黒さんたちから話を聞いて、何もその手だてを言わないと。それで、その後政務の方だけで総理のところに行かれて、清水社長を呼ぶということになったというときも、これももう政務の方だけですか。保安院とかそういう役所の関係の方なんかは。

○細野大臣 どうだったんでしょうね。短い会談だったんですよ。本当に10分か15分くらい。

○質問者 それで、もうそのままみんなで行かれたと。

○細野大臣 いや、総理が移動するときというのは、事前にSPとかも含めてやはり若干準備が必要なんです。1時間くらいやはり見るんですよ。いきなり総理が東電に行くのもえらいことだから、先遣隊で行けという話になって、それで私がその後すぐ、多分4時半とかくらいに東電にまず1人で乗り込んで、それで席を作ってもらったりして、総理が5時半頃ですか。1時間くらいですね、ちょうど。

○質問者 その後、統合本部が立ち上がっていった、より直接的に、テレビ会議システムもそこにあったと思うのですけれども、それがあつたこと自体はその前から御存じでしたが。

○細野大臣 知っていましたね。情報がそこにはあるらしいと。

○質問者 それはどの段階で、誰から。武黒さんたちから。

○細野大臣 それしかないですからね。

どういう仕組みかなんてことは分かりませんでした。意外と設備は整っているなと思ったんですよ。行って見て。

○質問者 そこまでの、14日の夜、最後に吉田さんとお話をされて、その後撤退というような話なんかいろいろと入ってくると。最終的に武黒さんたちに言ってもちょっと何も手だてを考えないというような、その間のどこかなんかで、吉田所長と直接話をした方がいいのではないとか、そんな感じの話にはならなかったんですか。

○細野大臣 そこが私も定かではなくて、まだやれるなみたいな電話を総理が夜中に清水

【取扱い厳重注意】

社長がいるときにしているかしていないか、そこはちょっとごめんなさい。総理から、大分経ってから、もう辞めた後か何か「したかな」とか言われて、本人も記憶をたどったみたいで、覚えていないんですよ。

○質問者 細野大臣が直接はされた記憶はないですかね。

○細野大臣 総理から言われて、撤退するしないのときに吉田所長にかけているのかもしれないのですけれども、自分で能動的に吉田所長としゃべりたいと思っただけではないです。できるだけかけないようにしていたので。そんなことで手を煩わせたくなかったし。

○質問者 そうすると、現場の方が実際にどう考えているかということについて、例えば吉田さんと直接話したり、あるいは菅総理から吉田所長に確認したけれどもこうだったよとか、そういうことは記憶として、未明頃の中ではちょっとないですかね。

○細野大臣 本当に私も寝ていないんですよ。1時間くらいどこかで、18日かくらいに寝ているのですけれども、それ以来もう3徹か4徹なんですよ。本当に人生で初めての緊張感の中でやっていたので、そこは覚えていないんですよ。そう言われればかけているような気もするんですよ。

ただ、例えば、事前に東電から電話が入って撤退騒動があるときに、どうなんですか吉田さんというふうにはかけていません。かけているとすれば、撤退しないと決めて、その後か何か総理に言われて確認をさせられたか何かでかけている電話があるかないかです。そこは定かではないのですけれども、逆に言うと、結構恐ろしいじゃないですか、そこは。私もずっと、会議の撤退騒動のときの会議もずっと出ていたのですけれども、その会議だけは言葉を一言も発していないんですよ。余りに大きな話なので、自分でもちょっとそういう判断ができなくて、そのほかの会議では、私は生意気ながら他の大臣を制御しても「俺はこう思う」と割と言っていたのですけれども、人の話を遮ったりとかしてしゃべっていたのですけれども、この会議だけは結構やっただけなんですけれどもしゃべってないんですよ。

だから、吉田さんに確認するのも一瞬確かに考えたので、今、記憶がちょっとあれなんですけれども、確認はできなかったんですよ。余りに大きな判断で。判断能力は薄れていたけれども、撤退したらそれはえらいことになるということは分かっていた。一方で、みんないろよと言って、ここで亡くなったりしたら、これは本当に自分でどうなんだろうかと、責任取れるんだろうかと逡巡はしていたんです。

事態が一応完全に収拾して海江田さんが大臣を辞めた後、海江田さんとさしで飯を食べたんですけれども、そのときのいろいろな思い出話をしている、海江田さんに「海江田さんはあのとき何を考えていましたか」と言ったら、全く同じことを考えていたと。

だから、みんなそれを考えていたと思います。だから、本当に真面目にそうとっていたんですよ。

○質問者 それで、実際にその後統合本部ができて、3月の15日からはずっとあちらの方

【取扱い厳重注意】

に細野大臣も行かれたわけですね。ちょうどその行かれた後間もなくして、2号機付近で何か異音というか、爆発騒ぎみたいな形になって、4号機の方も損傷が確認された。それはもう向こうにいるときに。

○細野大臣 はい。そうです。朝、6、7時頃ですよ。

○質問者 そこでやり取りを、吉田所長は恐らく免震重要棟の方で情報が入ってきて、その確認をしたりするやり取りはテレビ会議システムを見れば直接入ってくると思うのですが、それは全部テレビ会議システムの画面を見て把握されていたんですか。

○細野大臣 吉田所長がああとき、撤退させてくれ、一部を残してという話をしていましたよね。それを私は直接聞いていないんですよ。東電の中に、オペレーションルームのある大きな部屋があって、官邸の人間が、政府の関係者が詰める小さな部屋の一つ空けてもらったんですよ。初めは、私は総理と一緒にそこにいたんですよ。朝方、総理が閣議で官邸に帰る前は、寺田補佐官が中において、寺田補佐官が聞いているみたいです。私はそれを直接聞いていないんですよ。ただ、2号機のサブプレッションチェンバーが破断したのではないとか、4号機もどうも爆発したとかそんな話は、結果は聞いていましたけれども、吉田さんが60人残してみたいな話をしているのは、そのときは直接は聞いていないです。

ただ、そのときは、14日までとは、認識の共有という意味では情報量が全く違うから、東電本社にいれば全部情報が入るじゃないですか。ですから、そこはもう、そのことがどういう意味なのかということも含めて、情報の齟齬はなかったものでそれまでとは全然違う認識で受け止めてはいたんですよ。

○質問者 それで、その日の午前中に福島第一原発について、また避難区域を今度は20から30を屋内退避という形、避難ではなくて屋内退避ということでされておられるようですが、この意思決定をされる時というのは。

○細野大臣 このときは、私はもう東電にいましたから、これは加わっていないですね。

○質問者 これは官邸の方でされていると。

○細野大臣 官邸でやっているんだと思います。海江田大臣もこの日は火曜日なので閣議があったので、もう8時半頃にはいなくなっているのではないかと。9時半から閣議で。

15日は、実は私1人になったんですよ、政務は。寺田補佐官も総理のサポートで帰ったので。ですから、この11時は私は官邸にいないので、この判断は関わっていないです。

○質問者 その日ずっと東電の方におられたんですか。

○細野大臣 いや、一回総理に報告に行かなければと思って夕方帰りました。ちょっと覚えていないのですが、多分、また戻ってきたのが7時とかですから、5時とかその辺に一回官邸に帰ったんだと思います。それで報告をして、そしてもう一回戻ってきました。

○質問者 東電の方にですか。

○細野大臣 はい。

○質問者 それから、もう東電にずっと夜中もおられるんですか。一旦家の方にお戻りに

【取扱い厳重注意】

なられるとか。

○細野大臣 家に初めて帰ったのが、記録がないのですけれども、16日か17日に一回、余りにちょっと、服を一度も変えてなかったのでシャワーだけ浴びに帰ったんですよね。これが、15なのか16なのか分からないのですけれども、シャワーだけ浴びてそのまま。

もうちょっと前なのか。初めて家に帰ったのは、シャワーは一回浴びに帰っているのですけれども、寝に帰ったのは8月の15、16、17、この辺だと思いますけれども、そのときまでは、一回シャワーに帰っただけで帰ってはいなかった。だから、ずっと東電にいました。夜も、そのときから一瞬寝に、あのときくらいか。岡さんはいなかったですか。

○岡秘書官 僕は、しばらくしてから派遣されます。

○細野大臣 政務は誰もいなくなるのが非常にまずいと思ったので、途中から長島さんたちがちょっと手伝ってくれて、夜中の番をやってもらったんですよ。それで帰れるようになったんです。

○質問者 分かりました。では、一応ここで区切りで。

○質問者 3時間で当初申し上げて、実はまだ相当お聞きしなくてはいけないことがあって。

○細野大臣 何回もできないので、私は体力は全然大丈夫なので、皆さんお帰りの時間とかあるでしょうから、それでよければもうちょっといいですけども。

○質問者 いいですか。

○細野大臣 いいですよ、私は。区切りまでやっていただいて。もう一回くらいやる必要があれば。ただ、これを何回もということになるとちょっとなかなか時間を取れないかもしれないので。

○質問者 避難の関係で先ほどの話に補足して何点かお聞きしたいのですけれども、最初第一原発から半径3キロに避難指示、3月11日21時23分のものなのですが、これは、もし覚えていらっしゃるのならなのですが、3キロという数字が決まったやり取りの根拠とかは覚えていらっしゃいますか。

○細野大臣 このときは、まだ水が入ると思っていたんですよ。まさか、本当に水が全く入らなくなって、ベントの話はしていたかもしれませんが、こんなことになるかは思っていなかったんですよ。大変なことになるから何とかしなければいけないという意識だったんですよ。念のために3キロでしたね、このときは。

○質問者 この辺はやはり、班目委員長とかがその根拠を説明すると。

○細野大臣 班目委員長と保安院以外は判断できませんからね。どれくらい危険性があるかということは。班目委員長もそういう意味では本当に大変だったと思うんですよ。気の毒だったのは、一番詳しいとされていたから、彼が全部判断しなければならなかったもので、そこはちょっと割り引いて考えないと気の毒だとは思いますが。

○質問者 次に、12日の明け方5時44分になって、10キロに拡大しているのですけれども、このときの10キロにした根拠とか意思決定というのは覚えていらっしゃいますか。

【取扱い嚴重注意】

本当に10キロでいいのかという疑問は持っていましたね。

○質問者 もし御記憶があればなのですが、このとき、5時39分に2F10キロは出ているのですが、2Fも20キロにした方がいいのではないかというような話が出て、そのときに危機管理監の方から、2Fはまだ1Fほど深刻な状況ではないし、20キロになるとオペレーションが相当また大変なことになってくるので、一旦ここは10キロのままでいいのではないかというような発言があったという話があるのですが、覚えていらっしゃいますか。

○細野大臣 あったかもしれませんね。常に、危機管理監は避難をさせなければならなかったから、現実的に可能かどうかという意見は言う立場だったんですよ。彼は、それは事態を小さくしようということと言ったわけではなくて、現実的に避難させられるかという判断はしていた可能性はありますね。

○質問者 基本的に一連の官邸の5階で決めていたこの避難の指示の意思決定のところには危機管理監はいらっちゃって、避難実施の実現可能性の観点からの御発言があったということなのでしょう。

○細野大臣 そうですね。危機管理監はそんなに出しゃばって言うタイプの人ではないので、基本的には他の判断を尊重しつつ、最終で例えば10キロとか20キロとか決まった場合に、それはどれくらいでやれるかとか、現実的に可能かどうかみたいなことで意見は言っていたような記憶がありますけれども、そこからは全部任せたんですよ。

○質問者 例えば、避難するとしたときに、交通手段を準備しなくては行けませんよとか、どこに避難するか予め決めておかないと混乱しますよとか、そういう話というのは、この避難指示する会議の中で出ていましたか。

○細野大臣 伊藤危機管理監から、そういうことが大変なんだということは言っていましたよね。まさにそういう話が、どうやって移動するかとか、病院もあるとか、老人ホームもあるとか。

○質問者 それは、今の流れの中で言うと、このときに言っていたとか、そういう御記憶はございますか。

○細野大臣 ないですね。私の頭が炉の方に完全に行っていたので、もしかしたら多少出ているのかもしれないのですが、そこからはちゃんと議論してやってくれと。そのためにあの部隊があるわけですよ。そういう意識で、自分の中ではっきり切り分けていたんですよ。これは、今から思うとちょっと甘かったなとは思っていますけれども。

○質問者 ちょっと飛ぶんですけども、計画的避難区域と緊急時避難準備区域の検討をして、その後、細野大臣の方が現場の地元自治体との調整に伺われていたというふうにお聞きしているのですが、実際に行かれた市町村の方は。

○細野大臣 それは一回だけなんです。私が行ったのは、3月のたしか。

○岡秘書官 4月10日ですね。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 4月10日ですか。

これは、3月の28日に久しぶりに私は官邸の会議に呼ばれたんです。官邸には時々行っていたのですけれども、それは全部総理に報告するために行っていて、3月15日からは、官邸の中で多分いろいろ会議をやっていたと思うのですけれども、一切入ってないんですね。3月28日に初めて呼ばれて、それで SPEEDI のデータを初めて見たんですよ。それで、北西の方に行っているというのが出てきて、それを見て、これは原子力安全委員会が持ってきたんですけれども、初めになぜか私のところに説明に来て、すぐ避難した方がいいと言ってきたので、私もすぐ避難した方がいいと言って。それで、岡さんはいたんですよ。

○岡秘書官 私はいました。最初に補佐官室に委員の方がいらして、女性の委員がとにかくまなじりを決して、大変なんですと補佐官に申し上げて、ではすぐに大変だから行こうと官房長官室にその足でもう行って、という感じですね。

○細野大臣 それで避難させるべきだという話をしたのだけれども、いや待てという話になって、誰からともなくですね。避難してそれは大変だったというのもあるし、あとは、ちょっと28日だとプールの水が入るようになって落ち着いてきていたので、ちゃんと自治体と話をやらなければいけないということになって、飯館村の菅野さんはなかなか簡単に避難するという感じではなかったんですよ。それで、説明に行くから、今原子炉が、発電所の状態がどうなのかおまえも説明せよと言われて、10日にこれは松下副大臣と一緒に行くことになったんです。このとき会ったのは、県庁で飯館村長、議長、ほかに、川俣町長、南相馬市長、3人ですね。

○岡秘書官 県庁ではなく県の関連施設です。

○質問者 自治会館ですね。

○細野大臣 ここは本当に難しい判断だったと思うんですよ。私は避難しろと言ったけれども、果たしてあのおとき避難した方がよかったかよくなかったかはすごく今でも難しいとっていて、飯館村は1か月避難しなかったんですよ。それで、確かに受けた放射線量は若干上がったのだけれども、逆に避難はみんな近隣にしているんですよ。だから、飯館村長はいつか帰ってこられると言っていて、確かにみんな結構つながりを持って生活をしているんですよ。あのおとき逃げるとやっていたら本当にみんなてんでんばらばらに逃げたと思うんですよ。でも、被曝線量は少なかったと。

私は、28日はまだ緊急事態だと思っていたので、国が強制的に、村長が何と言っても逃げると言った方がいいと28日には確信を持って思っていて、官房長官にも強く言ったんです。

○質問者 結局、3月28日の SPEEDI の結果だけで避難を判断しなかった理由というのは、細野大臣は詳しくは。

○細野大臣 私は、このときの会議では最後までいましたか。

○岡秘書官 細野大臣が、まなじりを決した女性委員とともに官房長官の部屋に行って、

【取扱い厳重注意】

かなり厳しい口調で、私が補佐官というのはこんなに偉いんだと思うくらいに、びっくりするくらいに官房長官に進言して、わらわらと危機管理監だとか秘書官だとかも集まってきて、結局最後それは官房長官が預かるということで。

○細野大臣 そうそう、私はもう、28日がまだそんな落ち着いていなかったから、一刻も早く東電に帰りたかったんですよね。それがずっと30分くらいああでもないこうでもないと小田原評定みたいになってしまったので、任せるからと言って出たんです。

○岡秘書官 そうしたら夕刻くらいに、こんな感じになりましたという結果だけが下りてきて。

○細野大臣 それで、あのときに示された放射線量が、裸で外で1日いたら浴びるみたいな数値だから、家の中にいて服を着ているのだからというのでちゃんと計れという話になったという報告を聞いて、帰ってきてから大丈夫かなど。

○岡秘書官 そうですね。大臣はちょっと違和感を覚えつつも。

○細野大臣 それはそれで、全部はできないから、それは任せるしかないなど。

○岡秘書官 あのときは、たまたま細野大臣のところにその話が持ち込まれたから、トリガーを引いただけで、避難は枝野さんと副長官が担当して、炉の方は細野大臣というすみ分けができていましたから。

○細野大臣 枝野大臣と私と、そういうすみ分けがはっきりできていたんです。

○質問者 このとき細野大臣のところに安全委員会が上げてきた理由というのは、もう安全委員会の方が細野大臣に御説明したいということですか。

○細野大臣 東電の方に安全委員会も、班目委員長も当時は来ていて、日常的な接点が私と一番多かったと思うんですよ。それで補佐官室に来たんですよ。

○岡秘書官 先方が大事な報告があったので補佐官室に集まったんです。

○細野大臣 この4月10日に福島に入った以外は、ずっと行っていませんでした。私は、初めて1Fに入ったのは5月ですけども、それ以外は、地元は一回も回っていないので、そのときから多分、松下副大臣と福山副長官が地元の自治体の窓口をやっていて、ずっと飯館村とか、それこそ南相馬市とか市長さんたちとやり取りをするようになったんだと思います。

○質問者 この4月10日に細野大臣が行かれたのは、あくまで炉の状況を説明するという趣旨で行かれたということですよ。

○細野大臣 はい。そうですね。

○質問者 このとき、差し支えなければなのですが、飯館、川俣、南相馬とその避難の話をしたときに、反応というのは。

○細野大臣 いや、もう強烈でしたよ。絶対避難しないと。飯館村なんか、この村をどうやって守ってきた、までいの村と言って写真集を見せてもらったり、絶対守りたいんだと。やはりこちらにも気迫に押された部分もありましたよね。

川俣町長は、川俣は一部だったんですよ、本当に避難範囲になっているのは、本当にそ

【取扱い厳重注意】

うなのかと。こんなわずかなところで。この線量はどこでどうなんだみたいなことを、初めは穏やかな顔で話していたんだけど、避難の話になった途端顔色が変わって激しかったです。桜井さんは若干色合いの違う人なので、桜井さんのところはどこらかと言うと、もう屋内退避になっていたから、避難というよりは屋内退避の問題点を聞くという感じだったんですよ。そこだけちょっと違ったんですよ。

○質問者 結局飯館は、その後また松下さんとか福山さんのところで調整していったということですか。

○細野大臣 そうです。その前もやっていたんだと思います。飯館村長とは、割ともう話があるいろいろな上で会っているという感じですね。私は初対面だったんですけども。

○質問者 分かりました。ありがとうございました。

○質問者 ここから私の方から聞かせていただきたいと思います。

まず統合本部について若干補足的に聞かせていただきたいのですが、統合本部を設置するという話が出てきたのは、総理と清水社長とのやり取りで急に出てきたのですか。

○細野大臣 ここもちょっと思い込みが入っているかもしれないんですけども、清水社長を呼べと言ったんですね。御前会議みたいなものの最後か何かに。今から東電に行くという所で言っていたような記憶があるんですよ。

○質問者 その後、東電に行かれて、総理を本部長とし、事務局長ということで細野大臣が行かれることになったりとか、そういった調整というのでしょうか、打診というのは総理から話が事前にあったのでしょうか。

○細野大臣 いや、全く。それで、官邸に戻る前だったと思いますけれども、私に対して、ほかはみんな閣議があったりしますから、ここにいると。本部長は自分だと言って、海江田さんが副本部長で、ではその一番実務的な事務局長かなみたいかなというか。

○質問者 その後、3月27日から幾つかプロジェクトチームというのが立ち上がって個別論点について対応がなされていくのですけれども、このプロジェクトチームの立ち上げについて細野大臣の方で関与をされた部分とかはございますでしょうか。

○細野大臣 はい。これは、その前からやっていたんじゃないですかね。

○岡秘書官 これは僕の記憶なのですが、基本的には細野大臣が完全にそのときにはもう全体を仕切っていたので。

○細野大臣 そうだ、これは私が言ったんです。

○岡秘書官 それで目米のものに符合させるような形で。

○細野大臣

○岡秘書官

○細野大臣

○岡秘書官

【取扱い厳重注意】

○細野大臣

[Redacted]

○岡秘書官

○細野大臣

○岡秘書官

[Redacted]

○細野大臣 これは毎日やったんですよね。

○岡秘書官 ほぼもう毎日ですね。

○細野大臣 私と、武黒さんにしたのか、あのときは。

○岡秘書官 そうです。東電側の総括が武黒さんですね。

○細野大臣 それで、政府側も担当者を決めました。

○岡秘書官 みんなが、保安院だとかの人間がそれぞれ張り付いて、政府と事業者とがワンセットでワンテーマずつやっていった。

○細野大臣 そうです。間違いありません。

○岡秘書官 ただ、後ほどちょっと、例えばRHRの代替をあきらめるとかいろいろんことがあって、それを現状に近い形に再編して。

○細野大臣 再編して、大体終わっているという。

○質問者 発足して27日の4日後になるのでしょうか、4月1日に6チームに再編成をされているのですけれども、これは何か具体的なきっかけがあったということでしょうか。

○細野大臣 このときは、結構私が全部やっていたので。

○岡秘書官 統合本部の体制をもうちょっときっちり整理しましょうということで、まず幹部から清水さんを外したんですよね、たしか。こちらは菅さん、海江田さんを残して、

【取扱い厳重注意】

東電の方は、清水さんを飛ばして、勝俣さんを持ってきて、当時細野さんは明確な位置付けがなかったので、事務局長という形ですね。

○細野大臣 このときに正確に位置付けたのか。

○岡秘書官 ふわっとした本部というものだけがあったので、中身を整えたのです。

○細野大臣 私は、この頃まで東電本店2階のオペレーションルームに席がなくて後ろの方に座っていたんですよ。海江田さんは席があったんですけども。それで、その頃こういう位置付けになってから席ができたんです。

○岡秘書官 そうですね。また、特プロジェクトのリーダーとして西澤常務と並んで任命されました。

○細野大臣 それで、このときに、これは間もなく出ますから今日は御説明しようと思っていたのですが、今日はちょっと資料をお持ちしていないのですけれども、

これが25日に出ているレポートなのですが、これは情報公開請求が出ているので来週くらいに出るのですが、これだけは私はもう握り潰したんです。ほかの情報は全部もう会見をしてから全部、本当に全部出したのですが、こういう4号機のプールがそれぞれ空になったときにどういう影響があるかというものです。ちょっとなかなかしっかき見ないと分からないのですが、例えば、4号機が全部いった場合に、屋内退避10ミリシーベルトは70キロになると。70キロと言うと東京は入るんですよ。

○質問者 これは大変な話ですね。

○細野大臣 全部空になったらですよ。その代り、別にいきなりなるわけではなくて、ずっと空になるまでに、事象発生から大体1か月近くかかってこうなると。だから、十分避難はできると。ただし、これでいかに4号機のプールが深刻かということになったんです。

日本側は、当時へりを見て、それで水があると。みんなでこの映像を凝視して、この光っているのは水だと。それで拍手が出たんです。あれはいつ頃でしたか。多分23とか。

○岡秘書官 先ほどのSPEEDIがどうか言っていたときと同じ頃では。

○細野大臣 その頃なのですが、これは検証しなければいけないということで検証したんです。それで検証したときに、やはり4号機のプールを本当に補強しなければならぬと言うので、総理に言って、馬淵さんに補佐官になってもらったんです。馬淵さんは4号機のプールの補修とか、建屋の健全性とか、元々建設屋さんなのでそれをミッションとしてやってきて、それでそれに合わせて幾つか再編して。

○岡秘書官 燃料取り出しとか、かなり先のテーマが特別プロジェクトとして当時掲げられていたのは、米側の懸念が反映された形ではありましたよね。

○細野大臣 あと、リモートコントロールというのも、4号機のプールが、もしくは何か

【取扱い嚴重注意】

エスカレーターした場合に4号機のプールに水を入れ続けられるように、「キリン」の無人化とかをしたんです。燃料を入れる無人化、水を入れる無人化、あとは井戸も無人化して、上から水を入れられるように。これをやるためには近藤先生と私とで無人化でやるしかない。万が一、例えば爆発して誰もいなくなっても4号機のプールだけには水が入るとかですね。それと4号機のプールの支柱を作って建屋を守って、絶対そうならないようにするとか、やらなければならないというので、そういう問題意識で再編したんです。馬淵さんに幾つかのプロジェクトを仕切ってもらったんです。

○質問者 近藤先生というのは、どういう方ですか。

○細野大臣 原子力委員長です。

○質問者 これはちょっとまた、小佐古参与との関係で、近藤委員長の話を。

○細野大臣 小佐古さんは、またちょっと違うんですね。こちらは直接関与していないので。

これは私が分割発注して、近藤さんが作って、総理にだけ見せたんです。馬淵さんには見せました。これを見ないと馬淵さんは仕事できなかったのだから多分、秘書官も含めて本当に見ていないと思います、これは。

○質問者 アメリカからはいつ頃懸念が伝えられて、この資料がいつ頃作られてということとは。

○細野大臣 これは25日ですね。ですから、
これは本気で検討しなければいけないということと、特命で近藤委員長にお願いしたんです。

菅総理が辞めてから、こういうシミュレーションがあったと発言したので、私は、菅総理がしゃべらなければこれはもう全部葬り去ろうと思っていたのですけれども、それでちょっと出るということになって、請求対象になって、それでもう来週くらいに公開するのですけれども。

○質問者 その特別プロジェクトチームと日米協議の関係と申しましようか、そのプロジェクトチームにアメリカ側の人間が入るというわけではないと。

○細野大臣 直接は入れませんでした。そこは、外側からの見え方もあったし、皆さん大げさに聞こえるかもしれませんが、見え方によっては半分進駐軍みたいに見えたと思うんですよ。やはり日本が自力で絶対乗り越えなければいけない事態だと思っていたので、最大限の援助は欲しかったし、実際いっぱい物もくれたんですよ。バージ船とかですね。もうあらゆる技術面、あらゆる支援を彼らは惜しまなかったから、そういう意味では非常にありがたかったのですけれども、全部一緒にやって、下手すれば向こうの方が技術力がある、向こうが仕切るという形にすると、本当に乗り越えられないと思ったので分けたんです。彼らは常に来ていて、それぞれのプロジェクトに関与していたか、もしくは日本側がいつでも相談できるような体制にしていたので、部屋を持っていましたよね。

○岡秘書官 持っていないです。ただ、NRCはちょっと分かりませんが、分科会に

【取扱い厳重注意】

それぞれ参加をいただいて、それは政府機関だけではなくて、外国の研究者とか。

○細野大臣 それぞれのところで行っていたんですね。分科会の方には出ていたんですね。

○岡秘書官 ええ。

○細野大臣 分科会は、それぞれ違うところで行っていて、そこにはNRCは1人、2人ずつ代表者を出していましたね。

○岡秘書官 出たり、出なかったりですけども、出るものあれば出ないものも。

特プロというのはあくまでも、発足当時はちょっと足の長い、ちょっと先を見たプロジェクトを集めましょうと整理され、日々の冷却とか「キリン」がどうだとか、そういう話は2階のオペレーションルームでやりましょうと整理されました。その両者で出てきた課題で、外国に協力してもらいやすいものについては、とりあえず米側に持っていきましようと言って、毎日夜の会議で進捗状況を報告すると同時にリクエストをして。

○細野大臣 それで、例えばアイロボットとかタロンとか、そういうロボットを持ってきてもらったりですね。

○岡秘書官 ちょっと消してもらえますか。

<録音停止 01:34:34>

○質問者 こういった特別プロジェクトチームを立ち上げるに当たって、例えば総理だったり官房長官には事前に相談をすとか報告をすといったことは。

○細野大臣 総理にはこの特プロの話も米国の話もしていました。全部決裁を取ってやっていたけれども、当時の菅総理の判断は、とにかくおまえがいいと思うことをやれと。それがだめなら決裁を出すからという雰囲気だったんですね。

ですから、私も、原災法上総理が指示権を持っているので、総理が決めるべきことは何かと考えながらやっていたんです。東電もそのことは分かっていて、私がこういうふうに行うと言ったら、基本的にはそれに従ってはくれました。できるだけ独善にならないようにはしましたけれどもね。事前にちょっと聞いて、こういうのはどうだろうか。意外と東電の部長クラスとかその下のクラスというのは、会長に物を言えなかったりする部分もあるので、全部が全部いいようになったとは思いませんけれども、やってよかったのではないかとは思っているんですけどもね。責任者も明確になったし、政府と東電との協力関係というのは、この特プロを通じてできるようになったので。

○岡秘書官 これがなかったら無秩序にやっていたところをきれいに論点が整理されて。

○細野大臣 これを作って積み上げの議論をして、ロードマップを作ったんです。

○質問者 プロジェクトチームと離れて、統合本部での先ほどおっしゃったルーティンの業務の意思決定というのは、全体会合というものと、官邸の方々が詰めておられた小部屋というものがあつたように聞いているのですけれども、どういったところでどういう意思決定がされてというのは。

○細野大臣 実際のいろんな判断は、当時は武黒さんかな。武黒さんと武藤さん。

○岡秘書官 大体、毎日のオペレーションが終わるとば一つと情報が集まってきましたよね。

【取扱い厳重注意】

夕方あたりに、柳瀬、その当時総務課長と武黒さんの下に、まあ安井さんもそうですけれども、みんなが情報を入れて、では次の日はここに「キリン」を置いてとか、「キリン」を輸入してどうかということを決めては、これでいきましょうと海江田大臣や細野大臣に伺って、次のオペレーションを決めていくと。

○細野大臣 実際、安井さんがかなり決めていましたね。安井さんのことは私は信用していたので、技術的なことも疑問があったら彼が非常にシンプルに話してくれたので、安井さんがこれをやりたい、東電はなかなかやれないというときは、安井さんに私はどちらかという軍配を上げていたので、私が具体的に何をやるかと分かるわけではないので、そうやって決めていました。

私がやっていたことは、東電がやりたいのだけれどもできないことというのはいっぱいあるんですね。例えば「キリン」を輸入してくると、通関をするとか、道路の通行許可を出すとか、パトカーで先導すとか、自衛隊に出動を頼むとか、物がないうちにアメリカに調達をお願いすとか、それは全部私がやっていました。総理もそこはもう本当に全部任せてくれたので、3月のこの時期はほぼ何でも、思ったようにやると言ったらちよっと横柄に聞こえるかもしれませんが、その場で判断しなければならなかったもので、海江田大臣には必ず決裁を取って、総理にも確認をして、それで各部局に実質的な総理の指示を伝えるという役をやっていました。

○質問者 そうしますと、集まってきた情報を基にプラント対応が決められ、東電ができないことについても、落とすと言うとあれですけども、各行政機関に対して求めていくということをしていましたと。

○細野大臣 そうです。

○岡秘書官 その並びでアメリカとも。

○質問者 アメリカとの調整もやられていたと。

○岡秘書官 はい。

それで、ちょっと足の長いものは特プロでやると。ただ、いつの間にか特プロの方にも日々のルーティンのものが集まってきたので、その切り分けは分かりにくいです。

○質問者 分かりました。

先ほどちょっと出た話なのですが、4月の下旬、25日から統合本部の記者会見を開始されているのですが、3月15日に統合本部自体が立ち上がって、このタイミングで統合記者会見を開始されるに至った経緯というのは。

○細野大臣 これは、ちょっと遡ると、3月の20日前後に枝野長官から、自分も本当に体力的にもきつくなってきたから、発電所の方の記者会見をやってくれないかと頼まれたんですよね。もうちょっと前だったかもしれません。そのときは私はこちらで手いっぱいだったので、とても無理だと言って断ったのですが、そのうちやはりすごくいろんな人から言われるようになったのは、官房長官が会見していて、保安院が会見していて、当時文部科学省が会見を始めて、東電が本店と現地で見会っていて、それぞればらばらの

【取扱い厳重注意】

で、何とか統一化しないと世界からもいろんなことを言われると。誰が顔なのか分からないというふうに言われたんです。

それで、3月の終わりから4月の頭にかけて、これはちょっと何とかしなくてはいけないと思って、4月の頭頃だと思うのですけれども、会見を統一化しようとしたんですよ。官房長官から言われたこともあったので、官房長官の会見はそういう技術的なことは余り言わずに大まかな政府の方針を話す。現状認識。私のところで東電と保安院と文科省とを統合して、会見をしてそこで全てをやると。ワンボイスで。それぞれ立場は違ってもいいけれどもやるべきだと思ってしかけたんですけれども、できなかったんですよ。

それは、一つは、監督する側と監督される側と一緒に集まって会見するというのは余りいいことではないという筋論。保安院と東電はそういう関係じゃないですか。談合しているみたいに見られるのはよくないということが言われたんですよ。

○質問者 それは、どちらの組織からもそういう意見が出てきたと。

○細野大臣 特に保安院です。

あとは、それぞれの記者クラブがありますから。経産クラブ、文科クラブ、東電付きの科学部とかですね。こちらにはフリーは入っているけれども、こちらには入っていないとか、クラブの流儀があるからそんなに簡単には統一できないと、内々に打診したらマスコミからも反発があった。当事者からも反発があって、マスコミからも反発があって、それで一回断念したんです。

ところが、それから汚染水の問題もあったし、あとは INES の評価の問題もあったし、SPEEDI の問題もあって、本当に政府の信頼がズタズタになってきたなという印象があったので、もう一回これはまずいと思って、今度はやらせてくれと言って、海江田大臣と総理に相談したらそれはやった方がいいということなので、もう強引にまとめて、俺がやるから会見は基本的にここでやってくれというので決めたんですよ。それで、25日から始めたんです。

初めに一番やりたかったのは、しっかりこれまで公開していなかったので情報を公開することだったので、25日に SPEEDI のデータを出せと言った。一回私は見ていたんですよ、単位放出量の値を。あれを出せと言ったら出てきたんですよ。これで全部だと言ったら、全部だと文部科学省が言ったのだけれども、実はありましたと言って 30 日頃に持ってきたから大分、一悶着あったんですけれども、2日にもう一回出しているはずですよ。SPEEDI の2回目を。

○質問者 はい。5月の2日に。

○細野大臣 そのときにちょっと私が失敗したのは、その来た文科省の担当者が、パニックになると思ったんですみたいなことを言ったので、それを私が思わず言ってしまったんです。私が思ったのではなくて、担当者がパニックになると。よかれと思って、そういう配慮もしないと隠していた理由にならないから、やはりこういう生煮えの情報になるとパニックになると思ったようです。私は、ただそれを見て公開するべきだと思ったので

【取扱い厳重注意】

今日公開しましたと言ったけれども、パニックで隠していたととられてしまったので、そこはすごく失敗したと思っています。

○質問者 分かりました。

SPEEDI の話をこのままちょっと聞かせていただきたいのですが、3月の末くらいに文科省に対して情報公開請求がありまして、SPEEDI のデータを公表してほしいという要求がございまして、それへの対応ということで細野当時補佐官と福山官房副長官と関係省庁が協議をしているようなのですけれども、そのあたりはどのような議論をされたかというのとは。

○細野大臣 それは私も後から文科省から聞いて、メモまで見せてもらったのですけれども、当時は何をやっていたかという、飯舘村を避難させるかどうかという議論をしていたんですよね。23日にやって、多分その次2回目に集められたのが30日か31日か。これは岡山さん行っていないと思うけれども、この辺で2回目に集まって、そのときにその話が出たということを行っているようなのですけれども、そのときの主題は避難をさせるかどうかということだったんですよ。私、正直言うとこの23日にそういう判断がされたということにもそのときは違和感を持っていたし、また、本当に忙しい中で官邸の副長官室が何かに呼び出されて、延々と1時間くらいやったので、当時寝ていなかったからフラフラになりながら聞いていたのですけれども、記憶にないんですよね、その公開の話は。

公開すべきかどうかと聞かれれば、私はオウム返しで必ず公開すべきだと言ってきた人間だから、その打ち合わせで私が何か非公開にすべきだということを合意したみたいな話があるのですけれども、そこはちょっと納得できないんですよね。仮に非公開にすべきだと言っているとすると、私はこの4月の25日のときに、これで全部だなと言わないでしょう。

○質問者 そうです。そこが、当時3種類どうも計算されたものがあつたようでして、単位量を仮定した計算とですね。

○細野大臣 それは見たんですよ。

○質問者 安全委員会が23日から出していた逆推定のもの、あとそれぞれが様々な仮定を置いて行っていた計算、これが5月2日に出ることになるのですけれども、そういった峻別して計算結果を認識されているという。

○細野大臣 それは、私、5月2日の前の5月1日か4月の30日に見せられたんです。何でこんなものを隠していたんだと言って文科省の担当者と大喧嘩したんですよ。大喧嘩と言うとちょっと大げさですけども。しかも、4月25日に全部出せと。これは何人も聞いていますから。これで全部ですと言いきったのに何で出てきたんだと言ったら、パニックを恐れたんだと言って、それを記者会見で言って失敗したと申し上げましたけれども、そういう記憶なので、3月30日にそういう話があったということは、そのときに飯舘村の方を避難するかしないかで打ち合わせをした記憶はあるんですね。その最後にその話をしたとかしないとかいうことに関して、記憶がないんですよね。

【取扱い嚴重注意】

○質問者 もし幾つか御記憶ございましたらなのですが、恐らく4月の末の時点で文科省の担当者が、単位量放出を出せば全てであるというふうには彼らは認識はしていないはずなんです。それは、現に彼らは様々な仮定を置いて計算しておりますので。当時記者発表をされる前の段階で官房長官のところ、この SPEEDI データを公表するかしないかというような協議をされていたというふうに聞いておりまして、25日の記者会見の中でも補佐官の方から、官房長官の意向を受けて全て公表することになりました。

○細野大臣 それは、全部公開するというに関しては、事前に官房長官には許可を取っていますね。私がそれを言っているなら。

○質問者 それはいつ頃だったかというのは。

○細野大臣 違います。私が直接言ったのではなくて、官房長官からも全部公開されていると言われていましてと文部科学省の担当者が言ったんです。それは間違いないですね。

○質問者 分かりました。

○岡秘書官 当時、SPEEDI と言ったら避難、官房長官は一連のものとして意識されていたので、事務的にも当然了解を取るものという感覚がありましたね。

○細野大臣 そこは本当に誰かを責めたくないのであれなのですけれども、私は15日以降は官邸にいなかったんで、その間でどういうやり取りがあったのかということとは分からないんですね。官邸に呼ばれて打ち合わせをしたのは、本当にその避難の打ち合わせのときに、発電所の状況とかモニタリングの情報はどうかということと呼ばれて行っていただけなので、その打ち合わせ以外のことは分からないんですね。だから、どういう経緯があったかはちょっと正直分からないです。

それは30日ですか。

○質問者 やり取り自体は25日の午前中だったというふうに。

○岡秘書官 3月ですか。

○質問者 いや、4月です。4月の25日です。

○細野大臣 いや、4月の25日は私が会見した日ですから。

○質問者 その前の協議は、3月30日と31日、2日に分かれて行われているようなのですけれども。

○質問者 具体的な時間は、夕方6時過ぎくらいから30日はあったと聞いています。

○細野大臣 その頃に何回か打ち合わせをして、その後私は飯館村に行っていますから。私のスピード感と当時官邸のスピード感は随分違うなと思ったんですよ。東電にいて、本当にその場で判断しなければならないから、ぱっと決めなければいけないという緊張感を持ってやっていたんですけれども、官邸に行くと延々と1時間単位で打ち合わせがあるんですね。何十人も集まって。会議に入る前に20分くらい待たされたりとかして、それで30分とか1時間とか打ち合わせをするから、気持ちとしてはもう勘弁してくれと。しかも決定権もないし、ああだこうだと、もう情報も大体出揃っているのに決まらないから。これはちょっと愚痴になってしまうのですけれども、そういう感じで官邸に呼び出されてい

【取扱い厳重注意】

ましたね、その間は。

○質問者 その単位放出については。

○細野大臣 単位放出は、3月23日にもう持っていたと思いますよ。3月23日に北西に出ているものと、プラス単位放出のものを持っていたんじゃないですかね。それで、単位放出のものを見たのはすごくよく覚えているんですよ。

それを見たら、単位放出のものは確かに天気予報みたいで、風がこちらを向いたらこちらに行って、こちらに向いたらこちらに行ってと、余り意味はないなと思ったのは覚えています。

○質問者 23日のもので見られたときに、そのまま安全委員会の方で公表されているのですけれども、そこは補佐官の方で何か指示をされたとかというのは。

○細野大臣 公開すべきだと強く言いました。

○質問者 補佐官の方から。

○細野大臣 ええ。でも、これは枝野長官も公開すべきだと言っていましたね。似たようなものがいっぱいあったんですよ。本当に似たようなものが、どれを見ても同じだから、同じものを幾つも公開してもしょうがないので、一番分かりやすいのはどれかというので公開した。2、3枚あったはずなんですよ。コピーが違っただけなのか、シミュレーションが違ったのかよく分からないのですけれども。

○質問者 その後に24日に情報公開請求が来まして、各省どう対応をするかという協議で30日に官邸で話をされたそうなのですが、そのときに当時補佐官の方から、明日の天気予報みたいな形で、SPEEDIの拡散予報というものを毎日できないかというような御指示があったというふうに聞いているのですが、そういうやり取りをされた記憶は。

○細野大臣 毎日の風向きでありましたよね。それは見た覚えがありますし、その議論はしているのかもしれませんが。

○質問者 そこで公開するしないという話は、余りされた御記憶は。

○細野大臣 単位放出当たりのものは、たしか公開の議論はしたのですが、はっきり言って1時間ごとじゃないですか、あれは。3月の11日の1時間ごと、12日の1時間ごとで、そんなものを見ても正直分からないですよ。それで、公開してもしょうがないという話になったんですよ。公開すべきだというふうには常に思っていたと思うのですが、一方で、私はまだ会見していなかったので外向きには一切しゃべらない立場でしたから、余り強く、公開すべきだとか、これはこうすべきだというような意見は言っていなかったかもしれません。

○質問者 それで4月の25日に、官房長官も全て出すということでおっしゃられて、でも実はまだ出ていないものが幾つかあって、その後のやり取りに至るのですけれども、その当時、広瀬研吉参加が記者会見の直前に当時補佐官とこのSPEEDIの公表についてやり取りをされていたというふうに聞いているのですけれども、何かお話をされた御記憶はございますか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 当時、広瀬さんが会見をやっていたんですよね。初めの数日間は、1週間くらい。5月の2週目くらいまでか。統合本部で。

○岡秘書官 少なくとも、会見は毎日のルーティンなんですけれども、4時半に会見が始まるんですけれども4時から必ず打ち合わせをするので、発表事項について何らかのやり取りが必ずあるんですよ。本件が印象的なやり取りだったかどうかというのは、私は分からないんですけれども。

○細野大臣 この日はもしかしたら1回目なので、少し早目に打ち合わせをしているかもしれません。そのときに、前の日か何か打ち合わせをしたのかな。

○岡秘書官 こうした形の会見を始める前はみんなで集まっては、こんな感じでやっていくという打ち合わせを累次やりました。

○細野大臣 前の日にやっていたかもしれませんね。

○岡秘書官 中身は覚えていないですが、第一回は何をやるかというのはかなり入念に積み上げていきました。

○細野大臣 ただ、多分前の日くらいには言っておかないと、そのときに SPEEDI の情報の整理ができていないはずなので。

でも、その日は紙で出さなくてネットで出すと発表したんです。ですから、準備はそんなにしていないとすれば、私は25日の会見の前の打ち合わせは、SPEEDIの情報を全部出せと。これで全部だなどと念押しをしているはずですけどもね。

○質問者 文科省に。

○細野大臣 文科省、保安院、安全委員会の3者なんですよ。

○質問者 それで全てですという。

○細野大臣 全てですと言って。だから、その後出てきたので私は怒ったんです。

○質問者 その後、まだありますということで説明に事務方が来て、そのやり取りがあったときに、事務方からはどういった説明があったんですか。

○細野大臣 まだありましたと言って、30日か1日かどちらかにあって、文部科学省が持ってきたんですけれども、これは25日に言っていたじゃないかと。何でこんなものが今出てくるんだと言ったら、いやいやとかという話があって、それでパニックにならないようにみたいな話があったんですよね。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 ちょっと切ってもらえますか。

<録音停止 01:55:37>

○質問者 もう少しお伺いできればと思うのですが。

○細野大臣 では11時半までにしましょうか。

○質問者 3月11日から文科省に働きかけをされていたということなのですが、その後3月16日に政府の中でモニタリングの役割分担というのが整理されまして、文科省が測る、安全委員会がそれを評価する、そして原災本部がそれに基づく対応策を作ると。この整理

【取扱い厳重注意】

がされた経緯について、補佐官の方で御存じでいらっしゃいますか。

○細野大臣 これは、枝野長官がしたんだと思います。そういうことになったというのは聞きました。

ただ、私は当時、枝野長官には、文科省のモニタリングはひどいと。全然やる気がないし、3月12か13あたりで測れと言ったのを3日間くらいほかしていたので、もう本当に憤って何とかしてくれというのは言った覚えがあるんですね。その日だったか前の日だったかは分かりませんが、責任体制をしっかりとってくれというのは言ってあったので、そういう現実に応じて枝野長官が采配してくれたんだと思います。それですっきりはしたんですよ。責任体制は。

SPEEDIもそのあたりで何か調整していませんか。SPEEDIの役割分担も。

○質問者 そうですね。同じ日に。

○細野大臣 そうですよ。その会議には私は出ていません。16日は、プールに水を入れられないで大もめしていた日なので。

○質問者 モニタリングの中で海城モニタリング、先ほど出た話なのですけれども、大臣の方から各省に対して働きかけがあったというふうに聞いておまして、海城モニタリングを強化するべきであるという問題意識については、補佐官の問題意識ということで各省に。

○細野大臣 そうですね。これは、4月の頭に海水の放出の話があって、それで世界からも国内からも批判が殺到したので、どれくらい漏れているかというのを調べなければいけないと思ったんです。

ところが、文部科学省は一切やる気がないと。水産庁に言ったら水産庁は、そんなところの魚は食べないので、食べない魚は測りませんと言ったんです。では海上保安庁に測ってくれと言ったら、海上保安庁には釣り竿がないと、船はあるけれども。まあ海上保安庁もほかにも忙しかったし。

後はどこだったか。

○岡秘書官 東電に。

○細野大臣 東電はちよろちよろ測っていたんですけども、それで一回4月の下旬に打ち合わせをして、その3者、水産庁と海保と保安院と、文科省と安全委員会くらいを呼んでやったんですけども、全員で押し付け合いをして、それで一回別れて、次の日もう一回やったんですよ。そうしたらまた同じ状態だったから、時々そうやらないと当時は動かなかったんで意識的にちょっと机ひっくり返して、とにかく何とかしろと。1時間持ち帰って考えてきてくれと言ったら、ちょっと考えてきて、それで測れることになったんですよ。

それで、水産庁も試験的に測ると。水産庁が漁協に声をかけて、漁協で船を出してもらって、そこで初めは水を取って。厚生労働省も呼んだんです。そんな放射性物質を含んでいる水のところに行ったら健康によくないとかいう話まであって、それで基準を作れとか

【取扱い厳重注意】

何とかと言っただけけれども、基準を作っている時間はないのでとにかく測ってくれと言って、水だけ取って測り出したんですね。それで海域のモニタリングの強化というのを打ち出して、まず水を測るようにしたんです。

しばらくして魚もちょっと測りましたけれども、そういう経緯ですね。

○質問者 もう一件、モニタリングに関してですけれども、7月4日にモニタリング調整会議というのが開催されているのですけれども、これも大臣の御意向でということですか。

○細野大臣 そうですね。もうその頃には大分できるようになっていたのですけれども、文科省も徐々に、やはり4月頃からはよくなってきていて、それで実は6月22日に一回やっているんですよ、準備会合を。これが本当はもうスタートなんです。

何を考えたかという、もう全部私がやるのも手いっぱいになっていたんで、文科省にやらせようと思って。文科省が仕切れるようになったかなと思ったんです。そのときまでは、ちょっと目を離すとすぐ止めそうな雰囲気があったから、ずっとやっているかやっているかと言って、毎日会見をやっていたから、毎日モニタリング結果を私も見て、ちゃんと測っているという確認をしていたんですけれども、この頃は文科省もやれるようになっていたので。当時政務官が林久美子さんという、あれは私の高校の1つ後輩で割と指示をしやすかったんで、補佐官と政務官というのは本当はそういう上下関係はないのですけれども、林さんにちょっとやってくれ、任せるからやってくれと言ったら、分かりました、やりますと言うので、それで彼女に任せられると思ってこれを立ち上げたんです。

○質問者 それでは、総理から指示があったとかそういうものではないと。

○細野大臣 総理には決裁はしてもらっていると思いますけれども、私の発案でこれは作ったんです。

○質問者 もう一点、私からの最後なのですけれども、ちょっと先ほど出ました小佐古参与の活動で、プラント周りのことを小佐古参与から大臣の方にお話が行って、そこで。

○細野大臣 これは、多分私がいろいろ判断した中で一番失敗だと思いますね。本当に福島の皆さんに申し訳なかったし、菅政権でも申し訳ないなと思っているのですけれども、ちょっと経緯があって、空本さんが東芝出身で原子力の専門なんですね。平さんと空本さんは2人とも原子力の専門家で、この2人を使えということをみんながわんさか言ってきたんですよ。2人もやる気になっていたんで、ちょっと総理にも相談したらそういう議員で専門家は使えということだったので、では時々呼んで話をしようと言ってやり始めたんですよ、3月の初めの頃に。

そうしたらすぐに空本さんが、小佐古先生は自分の師匠だからこの人を使ってくれと言ってきたんです。一番初めに出てきた東芝の■■■さんは空本さんの元上司で、空本さんのことを私は余り知らなかったから、■■■さんに空本さんはどうですかと聞いたら、■■■さんは一番初めからいたから、■■■さんは、あの人はいいから是非むしろ使ってくれと言うので、■■■さんが言う空本さん、空本さんが言う小佐古さんならいいなと思ったんですよ。総理は当時、参与をいっぱい集めていたので、いろんな意見を持ってこいみたいなことを

【取扱い厳重注意】

言うから、誰かいないかみたいなのもあつたので、この小佐古さんと田坂さん、田坂さんはもともとダボス会議のときの菅総理のブレインだったので顔もつながっていたし、私も親しくなっていたので、この2人をブレインにしますかと言ったら、参与にしようということで即日参与にしたんです。それが一番初めの経緯です。

ただ、もう個人的にお話してという余裕がなかったので、当時スタートしていた会議があるのですけれども、私が、これも率直に言うとな班目さんが頼りにならないと思った後、原子力の安全の問題で一番頼りにしたのは近藤委員長なんです。先ほどのシミュレーションも作った。この人は人間としても信用できるし、判断能力も非常にある人だったので、近藤委員長のところで、週3日かもしれませんが、毎日朝8時から朝ごはんを食べながら80分から1時間くらい打ち合わせするという会議をやっていたんです。これは、近藤さん、尾本さん、田坂さん、それで小佐古さんと呼んで、あと保安院の根井さんと呼んで、それで馬淵補佐官、長島さんがいろいろサポートしてくれて、その長島さん、私でやっていたんです。そこでいろんな技術的なことを腹合わせをして、東電に対するセカンドオピニオンにもなったので、それを持っていくというのを、一つの会議体を立ち上げていたんです。

ところが、ちょっと小佐古さんというのは個性的な人で、多分非常に能力のある人なんですけれども、なかなか根井さんと合わなかったりとか、自分の言ったことが取り入れられないことをすごく不満に思っておられたりとか、私のところにはいろいろこれは調べた方がいいとかということを書いてくれて、それは私も生かしていたのですけれども、一方で、SPEEDIの話とかスクリーニングの話とかをされるのですけれども、私はそちらを担当していないのでそれは福山さんに言ってくれと言って、福山さんとも時々やってもらっていたのですけれども、これもなかなか上手く行かなくて、福山さんも忙しかったから、多分福山さんにも気の毒だったし、小佐古先生にも、結局自分の専門家としての知識を生かせないということでフラストレーションが溜まっていたという意味では、申し訳なかったような状況に途中からなってしまったんです。

それで、気が付いたときにはもう爆発していて、今から記者会見しますみたいなことになってあんなってしまった。

○質問者 分かりました。そういうアドバイスのものを直接、間接に補佐官のところに言っていた。

○細野大臣 そうですね。幾つか有益なアドバイスもあって、ちょっと変な話なのですが、海洋放出は小佐古さんのアイデアなんです。濃い水が漏れているのだから、そこから薄い水を出して濃い水をそちらに移したら圧力が下がって、それで出なくていいからそれでやったらどうだというアドバイスは小佐古さんのアドバイスなんです。紙も残っているのですけれども。

他にも幾つか、いろいろ食べ物の基準とかスクリーニングとかで、いっぱい彼は提出しているアドバイス資料みたいなものを全部公開していますけれども、その中に入っていないけれどもね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 分かりました。

○質問者 最後にポイントだけにします。5番目の件で、250ミリシーベルトに引き上げられた経緯なのですが、これはそもそも、東電側からの要請があったと聞いているのですけれども。

○細野大臣 こちらは、私は全く知らないんですよ。

○質問者 そうですか。分かりました。

そうしますと、500ミリシーベルトの話がそもそも出て、結局ぼしゃってしまったようですが、いつ、誰からこの話が出ていて、なぜぼしゃったのかという点について。

○細野大臣 これは、完全に私の発案です。今から言うと本当に非常識なことを言ったと思われるかもしれないのですけれども、ちょっと伏線がありまして、16日の夕方、自衛隊が4号機のプールへの注水に失敗しているんですね。その前後からプールの燃料が危ないということになって、

ちよっと切ってもらえますか。

<録音停止 02:07:50>

この16日のものを空振りして、何故空振りしたかという、放射線量が高いと言って空振りしたんですよ。17日の朝、16日に頼みこんで自衛隊と警察と消防に、それぞれ大臣に電話して頼み込んで、17日の朝自衛隊が初めて放水に成功してくれたんです。その日の後、成功はしたのだけでも、毎回こんなことをやっていたらとても事態を収拾できないと思っただけなんです。ちょっとその前にあって、それで私も自衛隊に何人か制服組でもものすごく親しい人間がいるので、そういう人間のアドバイスも受けたら、自衛隊は命令すれば何でもやると。だから使ってくれという話もあって、いろいろ考えたんですけども、やはり本当に自衛隊に覚悟して行ってもらうためには、この放射能の問題の恐怖を彼らに乗り越えてもらわなければならないと思っただけですよ。

それで、これも小佐古さんのアイデアかもしれない。

○岡秘書官 私はそのときいないので、それは分かりません。

○細野大臣 日本だけなんですよ、250にしているのは。各国500なんですよ。アメリカは、志願する人はリミットがないというのもあるんですよ。御存じですか。

○質問者 ICRPの基準ですよ。

○細野大臣 はい。志願兵も日本は作れないんですよ、250が上限で。私がやはりそのとき考えていたのは、本当にシビアになって放射線量が上がったら、誰もあそこに入れない、法律、このバリアがあると。しかも、今の、本当に浴びるのはわずか数ミリシーベルトだっただろう環境下ですら行かずに帰ってきた我が国のこの状況で、何とかなるのだろうかともものすごく恐怖心を覚えたんですよ。

これは上限を上げるしかないと思って、それで総理に提案したんです。その日に、総務大臣と防衛庁長官と、ごめんなさい、自衛隊と総務大臣だけかな、細川厚労大臣も呼んでいたかもしれませんが、私から提案してもちよっとおかしなことになるので総理から提案

【取扱い嚴重注意】

してもらったんです。そうしたらやはり強烈な、自衛隊と警察の方からはとんでもないという話があった。反対があるのは正直言うと予想していたんですね。

それでどういう話になったかという、250まではちゃんとやると。250までやるのなら問題ないだろうということで、私もそれ以上はごり押ししなかったんです。

○質問者 閣議と言うか、閣僚が集まった場においてその話が出たということですか。それとも、集めたメンバーだけで。

○細野大臣 そうです。集めたんです。これは長島さんに手伝わってもらったんです。私も手がなかったので長島さんに手伝わってもらって。

○質問者 厚労省と経産省と人事院に行かれたということなのですか。

○細野大臣 そうです。江利川さんに17日に会ったんですね。ごめんなさい、これは、江利川総裁が来て小宮山厚労大臣が来て、このとき中野さんもいたな。ちょっと定かではない。

もう一つ実は違うものやっけていて、その後放水ですごく混乱したんですね、自衛隊と消防と警察が。お互いに、どちらが先に行くかとか。それで、これもまずいと思ったので、自衛隊に指示権を持たせて、消防と警察をその下に付けるという指示書を総理から出してもらったんです。それは出たんです。内々の指示書なのですから、指示という形にはなりませんでしたが、そのときとちょっと混同しているかもしれません。

それくらい、この数日の自衛隊と消防と警察が、みんな本当に恐れながら、恐ろしいですよ、当然。恐ろしいながらも何とかしなければならないという精神的なトラウマを抱えながらやったのはきつかったんですね。これは、ほとんど表には出ていないのですけれども、炉がおかしくなった15日以降の16、17、18、19くらいまでというのは、本当にそれが大変だったんです。その中で250の話と総理の指示権で自衛隊に、そうすると有事になってしまうのですけれども、自衛隊が基本的には放水とかJヴィレッジの管理をするという話を持ち出したんです。

○質問者 次に、校庭の利用基準、これにつきましては1点だけなのですが、細野大臣が、当時この20ミリシーベルトを一つの目安にするという話になったときに、計画的避難区域の基準と同じ基準でいいのかという疑問をどなたかに話された御記憶はございますか。

○細野大臣 ここが一番辛いところなのですが、私は何度か会議に呼ばれていて、この時期4月に入ってからなのですが、誰かに言ったのではなくて会議の席で、論外だと。当時、20ミリシーベルト以上のところで学校を開いていたんです。即学校を休校にして、ゴールデンウィークまでに除染をして、やり直すべきだということを強く主張したんです。だから、みんな知っていると思います。ただ、外向きには言えないから、例えば記者会見なんかで聞かれたらメモしていることを言っていますけれども、中では強く主張していたんです。

そこでも文部科学省と激しくぶつかっていて、文部科学省で出てきたのが、旧文部省ではなくて旧科学技術庁の人間ばかり出てきて、安全だと言い張るので、しかも、郡山は土

【取扱い厳重注意】

を剥いだときにはけしからんとやったんですよ。

○質問者 文科省が。

○細野大臣 文科省が。

そこは一回決まっていたんです。私が一回会議に呼ばれなくて、20ミリでそのままやる、除染も必要なしと決めていたんですけれども、もう一回会議をやり直せと言って、もう一回集めてもらって、私は絶対反対だと。

○岡秘書官 随所でこういう話をしていたんですよ。

○細野大臣

結局文部科学省の当時の結論は、学校を休みにしたりすると PTSD になるからやらないと。剥いたら持っていくところがないからと言って、郡山のやったことに関しても非難していたんですよ。そうしていたら、小佐古さんの方からワーッと出てきて、いろんな運動が出てきて、追い込まれてしまって、結局1時間当たり1マイクロまで下げるということになってしまったんですけれども、これはものすごく不幸な結果だったですね。

○質問者 大臣が反対されていたのは、4月19日に校庭の利用基準というのを最終的に決めているようなんですけれども、それよりも前からそういう話をされていたと。

○細野大臣 そうです。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 いや、4月19日ですか。一回決めていたんですかね。

○質問者 4月の初め頃から検討して、4月19日に決定しているんですが。

○細野大臣 ちょっとごめんなさい、確かではないです。

○質問者 結構です。

○細野大臣 ただ、結局これはずっと尾を引いていて、ゴールデンウィークの後まで尾を引きましたから、何度か復活、盛り上がりも一回議論するみたいなことがあったんです。19の後もあったかもしれません。それで、文部科学省と言いながら旧科学技術庁系とそこでまたぶつかって、政務ともいろいろやり取りをして、この辺が一番こういうピアリングの辛いところなんですけれども、私は、やはり禍根を残す可能性があるぞと、そこはかなり強く言ったんですけれどもね。

○質問者 分かりました。

次の汚染水の放出に関して、これは4月4日に放出しているのですが、4月1日の段階で大臣が海洋放出はまかりならないという発言をされたという記録があるのですが、それは間違いないですか。

○細野大臣 はい。間違いありません。

○質問者 この発言はどういう背景でしょうか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 これは、特プロで、特プロは朝 10 時頃からやっていたよね。

○岡秘書官 そうです。10 時です。

○細野大臣 10 時頃からやっていて、私はちょっとその日何かで朝遅れて出たんですけども、遅れて出たら、当時私のことをサポートしてくれていた若手の議員の中の 1 人で石井登志郎君が出ていて。

○岡秘書官 これは大臣は出ていなくて、4 日でも会議を。

○細野大臣 そこで、海洋放出の話が出ていたと聞いたので、ちょっと。

○岡秘書官 4 月 1 日の会議で補佐官が出ていらして、絶対あり得ない選択だと。だから絶対やめとけということをおっしゃっているんです。

○細野大臣 言ったんですね。そのときは、東電の安直な感覚に私はちょっとびっくりして、これだけ迷惑をかけているのに薄いからと言って出すというのは何事だというふうに言ったんです。それは、私も別に間違っていなかったと思っているのですが、事態が変わったのが、次の日かなにかに濃い水が出ているのが分かって、あの濃い水は、全然質、量ともに違う意味を持つので、これを何とか止めようと言ってやったんですけども、止まらなかったんですよ、圧力が高くて。結局 4 日くらいまで。

○質問者 6 日に止まっています。

○細野大臣 6 日までかかっているんですね。どうやって止めるかで散々議論をしたのだけれどもなかなか止まらなくて、かつ、止まったとしてもまた出るかもしれない。この濃い水をどこかへ移さない。それで、3 日の段階で私は判断を変えたんです。それは、濃い水を止めるためには、薄い水はやむを得ないと。だから出すことを検討しようというので。ですから、これは海江田大臣によく相談はしたのですが、実質的には 4 日の海洋放出の判断は私の判断です。

誤算は、リエゾンもみんないたので、外務省もいて毎日説明会をしていると聞いていたので、そこで海外には説明に行っていると思っていたんですよ。確かに、4 日にしているんですよ。しているのですが、そこに韓国とかが来ていなくて、4 日に出してしまったのが結局通報していないというので、大騒ぎになってしまったんです。これは、私がこれまでやってきた中で言うと大失敗、本当に申し訳なかったことの一つですね。

ただ、ここは申し上げたいのは、出すという判断自体はやむを得なかったと思うんですよ。本当に状況がもうあれを止めないとどうしようもないという感じでしたから、間違っていなかったと思うのですが、ただ、やはりもう少しちゃんと説明しておかなければならなかったし、あれは相当政府のやっていることに対する信頼を損ねましたしね。それが今の漁協とのいろんな問題ともつながっているの、非常に申し訳なかったなと思っています。

○質問者 あれは我々役人でちゃんと気を回さなければいけないところだったと思います。

○細野大臣 いや、それでもあそこは。そこでもう反省して、それから必ず主要国には直接、うち外務省からもその頃からはリエゾンを回してもらって、その混乱もあったので

【取扱い厳重注意】

リエゾンを出してもらって、そこから外務省を通じて全部連絡するようにはしたんですけども、そのときはまだそういう体制にはなっていなかったんですよ。

○質問者 分かりました。それから次に行ってよろしいでしょうか。

○細野大臣 はい。

○質問者 先ほどもちょっと簡単に御説明いただいたので、補助的にですが、8番ですが、炉心溶融の関係で、炉心が溶融している可能性があるということの中村審議官が記者発表された3月12日の午後ですが、その後、それについて具体的に官邸の中でどのようなコメントが誰からあったのかということは御存じですか。

○細野大臣 3月12日の経緯は、私はよく知らないのですけども、その後4月頭あたりなのですけども、炉心損傷とかいう言葉を一回使っているはずなんですよ。残っていますか。

○質問者 燃料ペレットの溶融。

○細野大臣 燃料ペレットの溶融という言葉も一回使っているのですけども、炉心損傷は。

○質問者 炉心損傷という言葉は、東電が早いうちから使っています。

○細野大臣 使っていますよね。その言葉にしようという打ち合わせは一回、班目委員長なんかとした覚えはあります。それは、本当にどういう表現がいいのかというのは分からなかったんで、溶けていることは間違いないけれども、溶融の程度は分からないと。しかし、燃料損傷とかいうレベルではなかつたら。炉心というのはかなり中心が溶けているということですから、そういう表現にしようというふうに班目委員長なんかと話した覚えはありますね。

それで、記者会見でその言葉を使っていると思います。私は、途中から。それはやはり私のいろんな判断の中で言うと、まずかったと思います。

正直分からないのですけども、やはり希望的な観測に基づいてどういう表現が一番適切かという部分での議論になっていたと思うんですよ。ですから、メルトダウンという言葉自体は定義が非常に不明確な言葉なので余り使わない方がいいと思うのんですけども、やはり炉心溶融の可能性ありということは早い時期に認めるべきだったと思います。

○質問者 4月12日の中村審議官の記者発表を受けて、その後、保安院が記者発表するときには官邸の了解を得てから発表するということになっているのですが、あれほどあなたがそういうふうにすることにしたというか、要求したのか、そこら辺のいきさつというのは御存じでしょうか。

○細野大臣 いや、全く分からないですね。3月12日の何時頃ですか。

○質問者 12日の14時の記者会見の後です。

○細野大臣 その頃は、私は下にいたか、もしくは、この頃というのはそれこそベントができたかできないかとかとすったもんだをやっているときですから、まだ私、水素爆発していないので、地下にいるんですよ。記者会見を見ていないですから、そこは私は多分

【取扱い厳重注意】

いなかったんだと思います。

○質問者 最後ですが、先ほど来出ています日米協議、先ほどのお話ですと、大臣は3月18日にルース大使に会われて、その後日米協議に関しては政務の方の窓口的な役割とか代表的な役割をされているようなのですけれども、これ以降、細野大臣がそういう役割をするということになったのはどなたが、総理から何か。

○細野大臣 総理からです。総理に私が言ったんです、やらせてくれと。

○質問者 そういうことですか。

○細野大臣 はい。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 ちょっとあれなんですけれども、総理に言ってもらっているのですけれども、ほとんど自分で言っています。

○質問者 分かりました。

そうすると、それ以前に北澤大臣とが、松本大臣ですか、いろいろ動かれていて、それで何かお二人が動かれている代わりに今度、細野大臣がやられることになった、そのきっかけと言いますか、理由と言いますか。

○細野大臣

一番難しかったのは、やはり防衛省なのですけれども、防衛省に言ったのは、ミリミリの話はそちらでやってくれと。シーバーフとか来たんですけれども、そういう話にはタッチしないと。その代りそれ以外の、例えば医療の問題とか物の問題とか、そういったことも防衛省が調整していたのですけれども、それはこちらでやった方がいいからやらせてくれと言ったんです。

外務省は、松本外務大臣が私とたまたま同期当選なので非常に仲よくて、私にとっていい兄貴分なのですけれども、彼が、それはありがたかったのですけれども、全部おまえに任せるからと言って局長以下全部スタッフを付けてくれたんですよね。その会議に関しては、それで任せてくれて。

○質問者 その米側からの話を最初に受けられたのは、どなたなんでしょうか。

○細野大臣 長島さんですね。

○質問者 分かりました。

それから、支援物資受け入れの調整の関係なのですが、米側からの支援物資の受け入れについては大臣がいろいろ差配されたようですが、アメリカ以外からの受け入れについては。

○細野大臣 アメリカ以外からは、私が若干でも窓口をやったのは、フランス、ロシア。イギリスは直接的には、技術的ないろんなアドバイスなんかはありましたけれども物は余

【取扱い厳重注意】

りやっていないです。それくらいかな。

○岡秘書官 記憶ないですね。

○細野大臣 ロシアは、ロサトムとか、クルチャトフ研究所とか今も付き合っていますけれども、フランスはアレバとか。大統領も来ましたからね、フランスは。

あと、防護服とかは個別にありましたけれども、それは外務省が窓口をやってくれて、こちらへ来て少し配ったりとかというくらいです。

○質問者 そういう差配は、日米協議の前の関係省庁の打ち合わせの中で一緒にやっていたのでしょうか。

○細野大臣 そうですね。必要に応じてやっていた。あとは、そのロシアとかの話は、もう誰かに振っていたりはしたんです。例えば経産省の審議官にロシアのことはやってもらうとか、フランスは外務省のこの人とか、そういう感じでやっていてそことやり取りをして、全部会議体をやるのはもう無理だったので、共有する必要があるときは日米会議の前に日本側だけ会議をやって、日本側のところでささっと共有してそれで済ましていました。

○質問者 分かりました。

○岡秘書官 当時、関係省庁会議みたいなものがなかったもので、日米協議の前の会というのが事実上の関係省庁会議になっていて、それが機能していたと。

○質問者 分かりました。

○質問者 本当に長い間ありがとうございました。